

平成 24 (2012) 年度
文部科学省スポーツ・青少年局委託事業

青少年国際交流推進事業
日独青少年指導者セミナー B 3 (芸術分野)

「博物館における青少年教育」に関する 日独交流事業報告書

平成 25 年 3 月
財団法人 日本博物館協会

はじめに

本冊子は、文部科学省スポーツ・青少年局より委託を受けて実施した平成24年度「青少年国際交流推進事業／H独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」に関する報告書である。

H独間の国際交流事業は、次世代を担う青少年の相互交流を図ることを目的として、両国の政府間合意に基づいて昭和47年から実施されてきた。同事業の一つである「H独青少年指導者セミナー」は、主として、青少年の教育指導者の資質の向上と青少年育成の発展を目指して、日本では文部科学省が、ドイツではドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省が、対象となる指導者の活動分野に応じて、各団体に事業を委託して交流を行うものである。平成24年度の「H独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）」については、「博物館における青少年教育」をテーマとして実施されることとなり、文部科学省による企画公募を経て、日本博物館協会が受託・実施することとなった。

日本博物館協会では、事業検討委員会を設置し、事業を効果的に実施するための方法・計画について検討し、9月には7名の日本人をドイツに派遣するとともに、11月には7名のドイツ人の受け入れを行った。ドイツへの派遣では、ベルリンとゾーリンゲンに1週間ずつ滞在し、博物館における青少年向けのガイドツアー等を中心に、見学と意見交換が行われた。日本での受け入れにおいても、2週間にわたって様々な博物館を訪問し、教育普及活動の現状を視察した。どちらも驚きと発見に満ちた、充実した2週間だったと思われる。両国の参加者は博物館における青少年教育の重要性を改めて認識するとともに、自国における教育活動を新しい視点で捉え直し、今後の活動の充実・発展に向けて決意を新たにすることができたと確信している。

本報告書では、交流事業全体の概要（第1章）、ドイツへの派遣事業（第2章）、日本での受入事業（第3章）について述べるとともに、ドイツ派遣者によるレポートを第4章として収録した。ドイツの博物館と教育普及活動に関する情報が、このようにまとまった形で紹介されるのは初めてのことと言える。本事業の実施により、わが国の博物館における教育普及活動の一層の発展に多少なりとも貢献することができれば幸いである。

平成25年3月

財団法人日本博物館協会

目 次

はじめに

第1章 日独交流事業の概要

1. 日独交流事業の概要 1
2. 関係者名簿 3

第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要 5
2. ドイツでの行程 9
3. 行動地図 10
4. 行動記録 11

第3章 日本での受入事業

1. 受入事業の概要 19
2. 日本での行程 21
3. 行動記録 22
4. ドイツ派遣団からのコメント（評価会より） 34

第4章 ドイツ派遣者のレポート

1. ドイツの博物館における青少年教育
～ドイツ派遣事業に参加して～ 可児光生 37
2. ドイツ連邦博物館教育連盟について 藤井麻希 39
3. ドイツで訪問した施設等について
 - ①ドイツ歴史博物館（ベルリン） 可児光生 42
 - ②バウハウス資料館（ベルリン） 一條彰子 45
 - ③ベルリン近代美術館 倉成多郎 48
 - ④ベルリン国立博物館 絵画ギャラリー 秋山幸也 51
 - ⑤子ども博物館 MACHmit!（ベルリン） 鈴木里和 54
 - ⑥ベルリンの壁記念センター 鈴木里和 57
 - ⑦ドイツ連邦議会議事堂 倉成多郎 59
 - ⑧ケルン市博物館顧客サービスと
ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館 可児光生 62
 - ⑨シュニェットゲン美術館（ケルン） 西田亜未 65
 - ⑩ベンラート宮殿公園 秋山幸也 68
 - ⑪ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館 一條彰子 70
 - ⑫子ども博物館 Mondo Mio!（ドルトムント） 鈴木里和 73
 - ⑬鉄と鋼の博物館（ハッティンゲン） 藤井麻希 75
 - ⑭ペーパーミル産業博物館（ベルギッシュグラッドバツハ） 藤井麻希 78
 - ⑮ドイツ連邦共和国歴史博物館（ボン） 可児光生 81
 - ⑯ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟 西田亜未 83
 - ⑰リンドラー野外博物館 秋山幸也 86
 - ⑱ゾーリンゲン産業博物館 藤井麻希 89

付録

- 平成24年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する企画公募要領 93
- ドイツ派遣事業参加者募集要項 96
- 協力機関・団体等 98

第 1 章 日独交流事業の概要

1. 日独交流事業の概要

財団法人日本博物館協会では、文部科学省からの委託により、平成24年度「青少年国際交流推進事業／日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」を実施した。平成24年度における同事業のテーマは「博物館における青少年教育」である。

事業の実施にあたっては、事業検討委員会を設置して、社会教育や博物館教育の専門的立場から助言をいただき、事業の円滑かつ効果的な実施に努めた。また、ドイツ側のカウンターパートであるドイツ博物館教育者協会とは、決定直後から密に連絡をとりつつ、派遣および受入の準備を進めた。派遣事業に関しては、全国の博物館に広く派遣者の募集を行い、事業検討委員会を経て派遣者7名を決定、事前研修会を実施したうえで、9月に15日間の派遣を行った。受入事業に関しては、11月に15日間、ドイツ博物館教育者協会関係者7名を受け入れ、優れた教育活動を行っている我が国の博物館を訪問し、活動の見学や教育担当者と意見交換などを行った。また、異文化体験の観点から、派遣及び受入の両事業においてそれぞれ1泊のホームステイも行われた。

事業の流れは以下の通りである。

■ドイツ派遣事業参加者の募集

平成24年7月5日付けで、全国約1,100館の博物館長に、ドイツ派遣事業参加者の推薦を依頼した。推薦の期限は7月27日とした。期限までに17館から17名の推薦があった。募集要項については、巻末付録を参照いただきたい。

■事業検討委員会の開催（第1回、第2回）

平成24年7月9日に開催した第1回事業検討委員会では、ドイツへの派遣と日本での受入の両事業の趣旨等について共通理解を図るとともに、今後の方向性について検討を行った。8月2日に開催した第2回事業検討委員会では、ドイツへの派遣者7名の選考や、事前研修会の内容についての検討を行った。

■ドイツ派遣者の決定

事業検討委員会による選考結果をもとに、本人の意向を確認し、7名の派遣者を決定した。派遣者については、所属長への派遣依頼を行った。

■事前研修会の実施

ドイツ派遣者7名を対象として、平成24年8月23日に事前研修会を実施した。ドイツの学校教育制度や、ドイツ語の基礎知識、ドイツの博物館制度等についての講義のほか、旅行代理店による渡航関係の説明や、派遣者間での話し合いなどが行われた。詳細については、第2章にて述べる。

■ドイツへの派遣

日本からの派遣団7名は、平成24年9月13日から9月25日までの15日間の日程で、ベルリンとゾーリンゲンに滞在し、周辺の博物館等を視察訪問した。滞在中のすべてのプログラムは、ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP）によって準備され実行された。プログラムの概要や行動記録については、本報告書の第2章で述べる。また、訪問した各博物館や、そこで行われている教育普及活動に関する情報については、ドイツ派遣者が分担してレポートを作成した（第4章）。

■日本での受入

9月の派遣と同様に、11月にはドイツから博物館教育関係者7名を日本で受け入れた。期間は平成24年11月10日から11月23日までの14日間（ドイツ出発日を含めると15日間）である。日本でのプログラムは財団法人日本博物館協会事務局が主体となって企画・実施した。受入事業の詳細については、本報告書の第3章で述べる。

■事業検討委員会の開催（第3回）

今年度の派遣および受入の両事業に関する報告を主な議題として、平成24年12月17日に第3回事業検討委員会を開催した。9月のドイツ派遣事業に団長として参加いただいた美濃加茂市民ミュージアムの可児光生氏にも出席を依頼し、ドイツでの体験や感想について報告いただいた。今年度の事業の成果を今後につなげていくことが大きな課題として確認された。

2. 関係者名簿（敬称略）

■「博物館における青少年教育」事業検討委員会委員

| | | |
|-----|-------|-------------------------------------|
| 主査 | 鈴木 眞理 | 青山学院大学教育人間科学部教授 |
| 委員 | 後藤 文子 | 慶應義塾大学文学部准教授 |
| | 寺島 洋子 | 国立西洋美術館学芸課教育・普及室主任研究員 |
| | 永山 俊介 | 国立科学博物館学習企画・調整課 ボランティア活動人材育成推進室長 |
| | 半田 昌之 | 財団法人日本博物館協会専務理事 |
| 事務局 | 新妻 洋子 | 財団法人日本博物館協会事務局長 |
| | 守井 典子 | 財団法人日本博物館協会事務局長補佐 |

■派遣事業参加者（日本からの派遣団）

| | | |
|-------|-------------------|-------|
| 可児 光生 | 美濃加茂市民ミュージアム学芸専門監 | (団 長) |
| 一條 彰子 | 東京国立近代美術館主任研究員 | (副団長) |
| 秋山 幸也 | 相模原市立博物館学芸班主査 | |
| 鈴木 里和 | 渋谷区立松濤美術館学芸員 | |
| 倉成 多郎 | 那覇市立壺屋焼物博物館主任学芸員 | |
| 藤井 麻希 | トヨタ博物館学芸員 | |
| 西田 亜未 | たばこと塩の博物館学芸員 | (事務局) |

■受入事業参加者（ドイツからの派遣団）

| | | |
|----------------------------|--------------------------|----------|
| Mr. Peter Schüller | ノルトライン・ヴェストファーレン州立近現代美術館 | |
| Ms. Nicole Scheda | ゾーリンゲン産業博物館 | |
| Ms. Birgit Baumgart | シュヴェリーン州立博物館 | |
| Ms. Marie Lorbeer | 子ども博物館 MACHmit! | |
| Ms. Katrin Boenke | ユーゲントイム博物館協会 | |
| Dr. Ms. Hannelore Kunz-Ott | バイエルン州博物館委員会 | |
| Ms. Beatrix Commandeur | ペーパーミル産業博物館 | (団長兼事務局) |

第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要

ドイツへの派遣事業については、派遣者の選定と事前研修会の実施を日本博物館協会が、ドイツ滞在中のプログラムの企画および実施はドイツ連邦博物館教育連盟がそれぞれ担当した。派遣に至るまでの経緯については第1章で述べたとおりである。ここでは、ドイツ滞在中のプログラムについて記す。

■実施期間：平成24年9月13日（木）～9月27日（木）（15日間）

上記は日本発着日による。ドイツ滞在は9月26日までの14日間である。

■受入担当団体について：

ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP；Bundesverbandes Museumspädagogik e.V.）は、博物館教育関係者によって組織された連邦レベルの社団法人である。ドイツ連邦青少年文化教育連合会（BKJ；Bundesvereinigung Kulturelle Jugendbildung e.V.）の傘下にあつて、2012年および2013年に「博物館における青少年教育」をテーマとして実施される日独交流事業において、ドイツ側のカウンターパートを務める。ドイツ連邦博物館教育連盟に関しては、第4章のドイツ派遣者によるレポートを参照いただきたい。

■連絡担当者および通訳

（連絡担当者）

ドイツ連邦博物館教育連盟

- ・Ms. Beatrix Commandeur／ラインラント産業博物館連合（LVR-Industriemuseum）
- ・Ms. Marie Lorbeer／子ども博物館（MACHmit! Museum für Kinder）

ドイツ連邦青少年文化教育連合会

- ・ルッツ・リンケ氏（Mr. Lutz Lienke）

（日本語通訳）

- ・ハイケ・パチケ氏（Ms. Dr. Heike Patzschke）

■日本からの派遣者：

| | | |
|------|-------------------|-------|
| 可児光生 | 美濃加茂市民ミュージアム学芸専門監 | （団 長） |
| 一條彰子 | 東京国立近代美術館主任研究員 | （副団長） |
| 秋山幸也 | 相模原市立博物館学芸班主査 | |

鈴木里和 渋谷区立松濤美術館学芸員
倉成多郎 那覇市立壺屋焼物博物館主任学芸員
藤井麻希 トヨタ博物館学芸員
西田亜未 たばこと塩の博物館学芸員 (事務局)

■事前研修会の実施

ドイツ派遣予定者7名を対象として、平成24年8月23日に事前研修会を実施した。

財団法人日本博物館協会の半田専務理事による開会挨拶の後、参加予定者による自己紹介を
はさんで、文部科学省スポーツ・青少年局参事官（青少年健全育成担当）付 国際交流担当の角
屋主任から本事業に関する概要の説明を受けたうえで、講義に入った。

講義1では、文部科学省生涯学習政策局調査企画課第2係長の高谷亜由子氏に「ドイツの教
育制度について」と題して、学校教育制度等について説明いただいた。講義2では、ドイツ語
通訳の竹之内悦子氏から、ドイツ語やドイツでのマナーに関する説明があった。また、講義3
では、事業検討委員会の委員でもある慶應義塾大学准教授の後藤文子氏から、ドイツの博物館
制度等について紹介があった。

講義の後は、旅行代理店の担当者から渡航関係の説明が行われた。また、事務局からドイツ
でのスケジュールに関する説明を行った。最後に、派遣予定者間で、研修中の役割分担等につ
いて話し合いが行われた。ドイツ派遣団として、可児光生氏が団長を、また、一條彰子氏が副
団長を務めることとなった。

事前研修会のプログラムについては、次頁のとおりである。



平成 24 年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業

事前研修会 プログラム

日時：平成 24 年 8 月 23 日（木）10：00～17：00

会場：商工会館 7 B 会議室（所在地：東京都千代田区霞が関 3 - 4 - 2）

| 時間 | プログラム |
|--------------------|---|
| 10：00 | 開会 挨拶 財団法人日本博物館協会専務理事 半田昌之 |
| 10：05～ (10分) | 派遣事業参加者の自己紹介 |
| 10：15～ (15分) | 事業説明 文部科学省スポーツ・青少年局参事官（青少年健全育成担当）付 国際交流係主任 角屋理香氏 |
| 10：30～ (1時間) | 講義 1 「ドイツの教育制度について」 文部科学省生涯学習政策局調査企画課第 2 係長 高谷亜由子氏 * 学校やその他の教育制度、地理、州の独自性など |
| 11：30～ (30分) | 講義 2 「ドイツ語及びマナーについて」 ドイツ語通訳 竹之内悦子氏 * 簡単な挨拶や数字等、ドイツ語の基礎知識 * 服装、習慣、食事時の注意等 |
| 12：00～ (1時間30分) | (昼食・休憩) |
| 13：30～ (1時間) | 講義 3 「ドイツの博物館について」 慶應義塾大学文学部准教授 後藤文子氏 |
| 14：30～ (30分) | 渡航に当たってのインフォメーション トップツアー(株) 国際旅行事業部ストリームライン新宿支店 * ドイツの気候、電圧、電話のかけ方、旅行中の安全等について * 航空機への液体物持ち込み制限、スーツケースの重量制限等 |
| 15：00～ (15分) | (休憩) |
| 15：15～ (30分) | 事務局によるスケジュール説明 財団法人日本博物館協会 守井典子 * 研修日程と注意事項 * 帰国後のレポート作成について |
| 15：45～ (1時間15分) | 参加者間の打ち合わせ * 団長選出 * 研修中の役割分担、おみやげ等の相談 |
| 17：00 | 閉会 |

■ドイツでの行程：

約2週間のドイツ滞在のうち、前半はベルリンに宿泊して市内の博物館等を視察し、後半はゾーリンゲンに拠点を移して、ラインラント地方の博物館等を視察するプログラムであった。行程表と行動地図、日々の行動の記録については後述する。訪問先の博物館等で見聞きした内容については、第4章のドイツ派遣者によるレポートを参照いただきたい。

■ドイツでの宿泊先：

(ベルリン、9/13～9/18)

- ・Hotel “Carolinenhof”, Landhausstraße 10 10717, Berlin

(ゾーリンゲン、9/19～9/25)

- ・Hotel & Kaffeehaus “Hous Henn”, Blücherstraße 46, 42699, Solingen

■ホームステイについて：

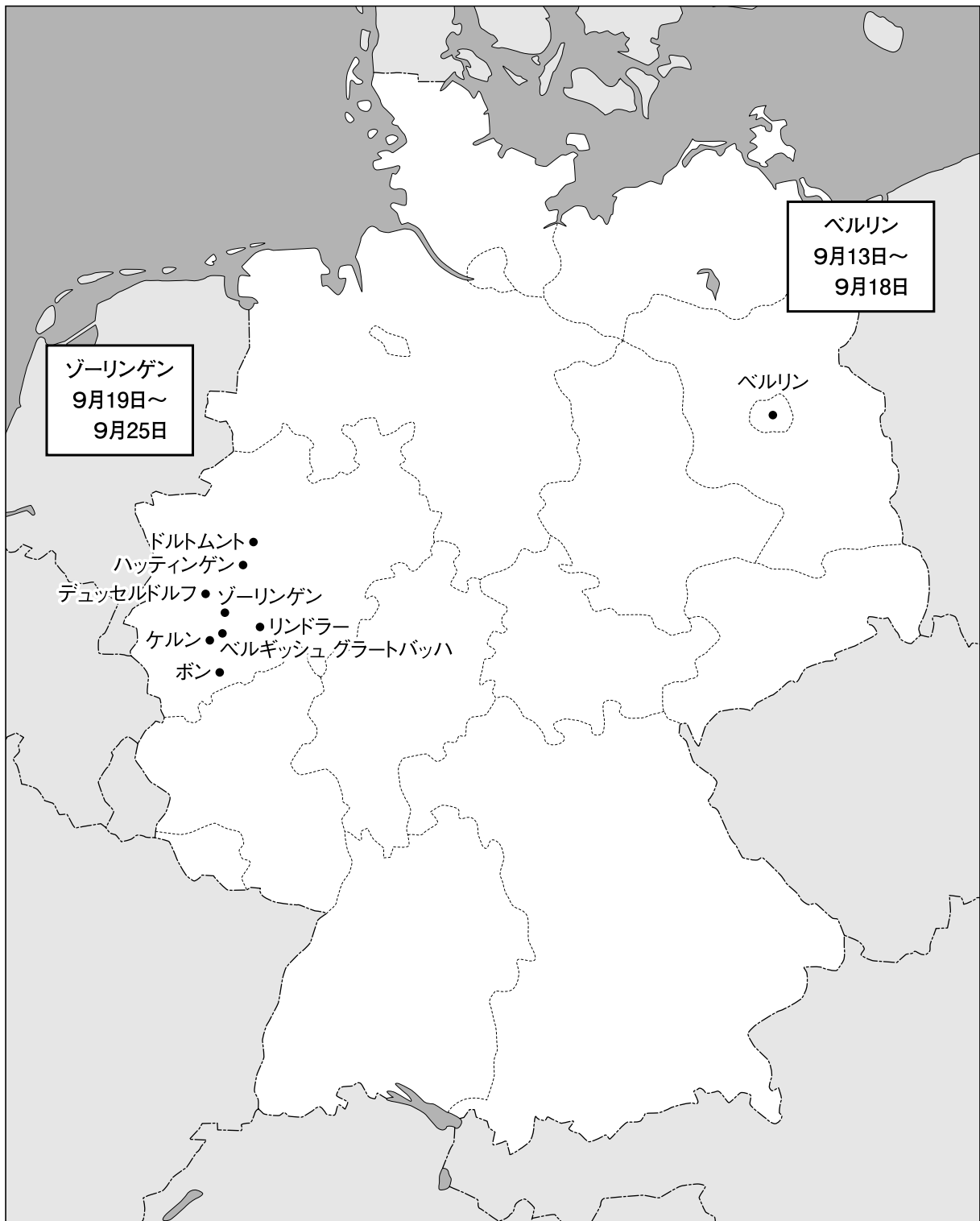
ベルリン滞在中の土日（9/15～9/16）を利用して、1泊のホームステイが行われた。ホストファミリーを務められたのは以下の方々である。

- ・Ms. Andrea Prehn, Colleague at the Institute for Museum Research (IfM) der Staatlichen Museen Berlin 【秋山幸也】
- ・Ms. Katrin Boemke, Managing director of the organization, “Jugend im Museum e.V.”, 【可児光生、倉成多郎】
- ・Mr. Lutz Lienke, former head of the Atrium Art Scholl (Berlin), Member of the board German Federation for Arts Education and Cultural Learning BKJ e.V. 【一條彰子】
- ・Ms. Jutta Polic, Social Pedagogue und museum educator, worked as a kindergarten teacher in Prenzlauer Berg-district of Berlin 【藤井麻希】
- ・Ms. Marie Lorbeer, Museum educator, Managing director of the MACHmit! Museum für Kinder 【鈴木里和】
- ・Ms. Ines Hahn, Faculty Fine Art, Leader of the faculty photography in the foundation museum of the town Berlin 【西田亜未】

2. ドイツでの行程

| | 月/日 | 宿泊地（訪問先） | 研修内容 |
|----|---------|--|--|
| 1 | 9/13（木） | ベルリン | 成田発（12:40、LH715便）、フランクフルトにて乗り継ぎ（LH2050便） ベルリン着（20:05） ホテルにチェックインの後、夕食（ギリシャ料理） |
| 2 | 9/14（金） | ベルリン | プログラム説明会 ベルリン市内観光の後、昼食 ドイツ歴史博物館の見学 子ども博物館（MACHmit!）にて夕食 |
| 3 | 9/15（土） | ベルリン | 朝食の後、チェックアウト ヴィンターフェルト市場の散策。昼食の後、バウハウス資料館を見学 夕方からホームステイ（ホストファミリーとの対面の後、各ファミリーにて夕食） |
| 4 | 9/16（日） | ベルリン | ホームステイ（各ファミリーとの自由行動） 夕食会（ホストファミリーとの送別会） |
| 5 | 9/17（月） | ベルリン | ベルリン近代美術館の見学 ベルリン国立博物館（絵画ギャラリー）の見学 |
| 6 | 9/18（火） | ベルリン | 子ども博物館（MACHmit!）の見学と昼食 ベルリンの壁記念センターの見学 夕食の後、ベルリンでのプログラムについて意見交換 |
| 7 | 9/19（水） | ゾーリンゲン | ホテルをチェックアウト ドイツ連邦議会議事堂見学の後、ベルリン中央駅よりICEにてゾーリンゲンへ ゾーリンゲン中央駅に到着。ホテルにチェックインの後、夕食 ゾーリンゲンでのプログラムについての説明会 |
| 8 | 9/20（木） | （ケルン） | 列車にてケルンへ移動 ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館見学の後、館内にて昼食 シュニットゲン美術館の見学 ケルン市街散策、夕食の後、列車にてゾーリンゲンへ |
| 9 | 9/21（金） | （デュッセルドルフ） | 列車にてデュッセルドルフへ移動 ベンラート宮殿公園の見学 昼食の後、デュッセルドルフ市街へ移動 NRW州立近現代美術館の見学 ライン川散策、夕食の後、列車にてゾーリンゲンへ |
| 10 | 9/22（土） | （ドルトムント） （ハッティンゲン） | 列車にてドルトムントへ移動 子ども博物館（MOND MIO!）を見学 列車にてハッティンゲンへ移動 鉄と鋼の博物館を見学。列車にてヴッパタールへ移動 |
| 11 | 9/23（日） | （ヴッパタール） （ベルギッシュグラッドバッハ） （ケルン） | オペラハウスにてモダンダンス鑑賞の後、タクシーにてゾーリンゲンへ 列車にてベルギッシュグラッドバッハへ移動 ペーパーミル産業博物館の見学 館内にて昼食の後、折り紙のワークショップに参加 タクシー及び列車にてケルンへ移動 ケルン市街見学（日本語ガイドツアー）、夕食の後、列車にてゾーリンゲンへ |
| 12 | 9/24（月） | （ボン） | 列車にてボンへ移動 NRW州博物館教育連盟による会合に参加 会合の出席者とともに昼食の後、ドイツ連邦共和国歴史博物館を見学 列車にてゾーリンゲンへ |
| 13 | 9/25（火） | （リンドラー） （ゾーリンゲン） | タクシー等にてリンドラーへ移動 野外博物館を見学。食事をつくるワークショップを体験（昼食） タクシーにてゾーリンゲンへ移動 産業博物館を見学の後、ドイツにおけるプログラムについて意見交換。 館内レストランにて夕食。 |
| 14 | 9/26（水） | 機内泊 | ホテルをチェックアウト。タクシーにてケルン中央駅へ移動 ICEにてフランクフルト空港へ移動（10:55、LH371便） フランクフルト発（13:50、LH710便） |
| 15 | 9/27（木） | | 成田着（7:55） |

3. 行動地図



4. 行動記録

2012年9月13日(木)

- 10:40 成田空港集合。
12:40 成田空港出発(ルフトハンザ航空 LH715 便)。

(以下はドイツ時間)

- 18:00 ミュンヘン到着、ベルリン行きへ乗り継ぐ(ルフトハンザ航空 LH2050 便)。
20:40 ベルリン・テーゲル国際空港に到着。
空港にて関係者5名による出迎えを受けた後、車にてホテルへ移動。

※出迎え: Mr. Lutz Lienke (BKJ 役員)

Ms. Katrin Bonke (Jugendim Museum e.V.)

Ms. Marie Lorbeer (MACHmit! museum)

Ms. Viktoria Töws ※引率(全行程同行)

Ms. Dr. Heike Patzschke ※通訳(全行程同行)

- 21:30 ホテル Carolinenhof に到着、チェックイン。
ベルリン滞在中は、ホームステイを除き、同ホテルに宿泊した。
22:00 ギリシャ料理店「Nea Knossos」にて夕食。
23:30 ホテル着、解散。

2012年9月14日(金)

- 9:00 ホテルにて、ドイツ側より、ベルリン滞在中のプログラムについて説明を受ける。
10:00 ベルリン市内観光。
バスによる車窓見学のほか、コンツェルトハウス、トレプトウ公園、チェックポイントチャーリーにて下車。
13:00 昼食。食後は徒歩でドイツ歴史博物館 (Deutsches Historisches Museum) へ。
15:00 ドイツ歴史博物館見学。

※対応者: Dr. Drothea Parak



- 17:00 トラムにて子ども博物館 (MACHmit! Museum für Kinder) へ移動。
ドイツの学芸員の研修グループである「QuAM 2012」のメンバーと合流。
- 18:00 子ども博物館内のレストランにて夕食。
- 20:00 写真スライドによる講義。
- 22:00 ホテル着、解散。

2012年9月15日(土)

- 9:00 ホテルをチェックアウト。
- 10:00 ヴィンターフェルト市場
(Winterfeld-Market) を見学。
- 12:00 トルコ料理店「Hasir」にて昼食。
- 14:00 バウハウス資料館 (Bauhaus Archiv) 見学。
※対応者: Ms. Barbel Mees
- 16:30 Mr. Lutz Lienke の自宅にて ホストファミリーと面会。
- 17:00 ホームステイ (ホストファミリーと白山行動)。



2012年9月16日(日)

- ホストファミリーと白山行動。
- 18:00 ドイツ料理店「Nussbaum」に集合し、ホストファミリーとの送別会。
- 21:00 ホテル着、解散。

2012年9月17日(月)

- 9:00 ホテル出発。
- 10:00 ベルリン近代美術館 (Berlinische Galerie /Museum für Moderne Kunst) 見学。
JIM (Jugend im Museum) によるワークショップに参加。
※対応者: Ms. Ulrike Andres、Ms. Song Hee Lee
- 12:00 小中一貫校である Kantine Waldorf Schule の食堂にて昼食。
- 14:30 ベルリン国立博物館の絵画ギャラリー (Gemaldegalerie Staatliche Museen zu Berlin) を見学。
※対応者: Ms. Bellin、Ms. Anja Birkel
- 19:30 ギリシャ料理店「Nea Knossos」にて夕食。

22:30 ホテル着、解散。

2012年9月18日(火)

9:00 ホテル出発。

10:00 子ども博物館見学

※対応者: Ms. Marie Lorbeer

12:30 子ども博物館内カフェにて昼食。

13:30 ベルナウアー通り沿い壁跡地にてガイドツアー参加。

15:00 ベルリンの壁記念センター (Gedenkstätte Berliner Mauer) の壁跡地にてガイドツアー参加。

16:00 ベルリンの壁記念センター内セミナー室にて概要説明と質疑応答。

18:30 オーストリア料理店「Brecht-Keller」にて夕食。

ベルリン滞在中のプログラムに関して意見交換を行う。

22:30 ホテル着、解散。



2012年9月19日(水)

8:00 ホテルをチェックアウト。

9:30 ドイツ連邦議会議事堂 (Bundestagsgebäude) にてガイドツアー。

※対応者: Dr. Roland Wirth

12:40 ベルリン中央駅見学。

13:48 ICE (インターシティ・エクスプレス) にてゾーリンゲンへ移動。

18:24 ザーリンゲン中央駅に到着。

中央駅にて関係者による出迎えを受けた後、車にてホテルへ移動。

※出迎え: Ms. Beatrix Commandeur (ペーパーミル博物館)

Ms. Nicole Scheda (ゾーリンゲン産業博物館)

Mr. Peter Schüller (NRW州立近現代美術館)

19:10 ホテル Haus Henn に到着。

チェックインの後、車にて鉄橋 Münstener Brücke を見学。

20:00 ラインラント地方の伝統料理の店「HausMünst」にて夕食。ゾーリンゲン滞在中



のプログラムについて説明を受ける。

23:00 車でホテルへ移動。到着後、解散。

2012年9月20日(木)

8:20 ホテルを出発し、電車にてケルンへ移動。

10:00 ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館 (Rautenstrauch-Joest Museum) 到着。
ケルンの博物館顧客サービスの機構について説明を受ける。

※対応者: Dr. Matthias Hamann

10:45 民族学を扱うラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館を見学。

※対応者: Ms. Rita Böller, Mr. Peter Mesenhöller

12:50 ミュージアムカフェ「KOLBS」にて昼食。

13:30 Ms. Rita Böller 及び Mr. Peter
Mesenhöller との意見交換。

14:00 中世美術を扱うシュニユットゲン
美術館を見学

※対応者: Dr. Matthias Hamann

16:00 郵便局にて日本博物館協会宛てに
資料等を発送。

18:00 ケルン大聖堂見学、市内散策。

19:45 ケルン伝統料理店「Kölner Brauhaus
Gaffel am Dom」にて夕食。

22:00 電車にてゾーリングゲンへ移動。

23:00 ホテル着後、解散。



2012年9月21日(金)

8:30 ホテル出発、電車にてベンラートへ移動。

10:00 ベンラート宮殿公園を見学

※対応者: Ms. Dobrileit

12:30 ベンラート宮殿内レストランにて昼食。

ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟の関係者から取材を受ける。

※インタビュアー: Ms. Heike Herber-Fries

13:50 ترامにてデュッセルドルフ中心部へ移動。

14:30 ノルトライン・ヴェストファーレン州立近現代美術館 (Kunstsammlung Nordrhein-

Westfalen : K20、K21) 見学。

K20内のラボ(ワークショップ用スペース)でワークショップを体験。

※対応者: Mr. Peter Schüller

- 16:30 K21へ移動し、館内を見学。
- 17:30 映像と音楽のワークショップ「ポリフォニー」を見学。
- 19:00 ライン川沿いを歩いて移動。
- 19:45 デュッセルドルフ市内のレストラン「Bistro Zicke」にて夕食。
- 22:25 電車にてゾーリングゲンへ移動。
- 23:30 ホテル着後、解散。

2012年9月22日(土)

- 8:15 ホテル出発、電車にてドルトムントへ移動。
- 10:00 子ども博物館(Mondo mio Kindermuseum)を見学。
博物館教育プログラムについてのプレゼンテーションを受ける。
※説明者: Ms. Elisabeth Limmer
- 12:30 電車とバスを乗り継ぎ、ハッティンゲンへ移動。
- 13:45 ヴェストファリア地方産業博物館連合の鉄と鋼の博物館(LWL-Industriemuseum
Henrichshütte)に到着。館内レストラン「HENRICHS」にて昼食。
- 14:50 鉄と鋼の博物館を見学。
博物館教育プログラムについてのプレゼンテーションを受ける。
※説明者: Ms. Birgit Diermann
- 16:40 コーヒーブレイクの後、本派遣
事業の受入団体である博物館教
育連盟(BVMP)の組織と活
動に関して、プレゼンテーショ
ンを受ける。
※説明者: Ms. Anja Hoffmann
- 17:25 バスにてヴッパータールへ移動。
- 18:20 駅で軽食を購入した後、懸垂式モノレールにて移動。
- 19:30 ヴッパータールオペラハウスにてヴッパータール舞踊団のモダンダンスを鑑賞。
- 23:00 車にてゾーリングゲンへ移動。
- 23:45 ホテル着後、解散。



2012年9月23日（日）

- 8：45 ホテルを出発、電車にてベルギッシュ・グラッドバッハへ移動。
- 10：30 ベルギッシュ・グラッドバッハ到着後、車にて博物館へ。
- 11：00 ラインラント地方産業博物館連合のペーパーミル産業博物館
（LVR-Industriemuseum Papiermühle Alte Dombach）を見学。館内で、マックス・ブルッフ少年音楽学校によるコンサートあり。
※対応者：Ms. Beatrix Commandeur
- 13：30 館内のカフェにて昼食。
- 14：10 同館の「折紙ワークショップ」
に参加し、来館者等と交流。
- 17：00 タクシーと電車にてケルンへ移動。
- 18：00 日本語ガイドによりケルン市内を
観光。
- 20：00 市内レストランにて夕食。
- 22：00 電車にてゾーリングゲンへ移動。
- 23：00 ホテル着後、解散。



2012年9月24日（月）

- 7：20 ホテル出発、電車にてボンへ移動。
- 9：50 ドイツ連邦共和国歴史博物館（Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik, Bonn）着。
ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟（LV MP NRW）の会合に参加。
- 11：15 他の参加者らと共に昼食。
- 12：00 歴史博物館を見学。
- 15：00 旧西ドイツ連邦会議場（Bundesrat）を見学。
ワークショップ「youth debate」について解説を受ける。
※解説者：Ms. Helena von Wersebe、Ms. DorotheeDennert
- 17：00 電車にてゾーリングゲンへ移動。
- 20：00 ホテル着後、解散。

2012年9月25日（火）

- 8：30 ホテル出発、車にてリンドラーへ移動。
- 10：00 ラインラント地方産業博物館連合のリンドラー野外博物館（LVR-Freilichtmuseum

Lindlar) を見学。食事を作るワークショップ「Boiling with herbs」を体験（昼食）。

※対応者：Ms. Hilde Ullrich

13：50 車にてゾーリングゲンへ

15：00 ラインラント地方産業博物館連合のゾーリングゲン産業博物館（ヘンドリクス鍛造博物館（LVR-Industriemuseum Gesenkschmiede Hendrichs））を見学。

※対応者：Ms. Nicole Scheda

17：00 ドイツにおけるプログラム

について意見交換。

19：00 館内レストランにて夕食。

22：30 ホテル着後、解散。



2012年9月26日（水）

8：30 ホテルをチェックアウト。電車にてケルン中央駅へ移動。

10：20 ケルン中央駅にて搭乗手続きを行う。

11：05 ICEにてフランクフルト空港へ移動。

13：50 フランクフルト空港を離陸（ルフトハンザ航空710便）。

（以下は日本時間）

2012年9月27日（木）

8：46 帰国。成田空港にて解散。

第3章 日本での受入事業

1. 受入事業の概要

日本での受入事業については、ドイツ連邦博物館教育連盟（B V M P）に所属する博物館教育関係者7名を対象として、日本博物館協会が企画し実施した。9月のドイツ派遣事業においてドイツで用意されたプログラムを参考にして、日本の博物館における教育普及活動への理解を主な目的としつつ、日本人の生活や文化に触れるよう工夫した。日本で実施したプログラムの概要は以下の通りである。

なお、7名全員が初めての来日だったこともあり、日本滞在中に多くのことを学び、また様々な刺激を受けて、帰国されたことと思う。プログラム終盤で行った「評価会」でドイツ側から寄せられた感想や意見については、本章の第4項に「ドイツ派遣団からのコメント」として掲載させていただく。

■実施期間：平成24年11月9日～平成24年11月23日（15日間）

上記はドイツ発着日による。日本での滞在は11月10日からの14日間である。

■ドイツからの派遣者：

- ・ペーター・シューラー（Mr. Peter Schüller）
／ノルトライン・ヴェストファーレン州立近現代美術館
- ・ニコル・シェーダ（Ms. Nicole Scheda）／ゾーリンゲン産業博物館
- ・ビルギット・バウムガルト（Ms. Birgit Baumgart）／シュヴェリーン州立博物館
- ・マリー・ロアベア（Ms. Marie Lorbeer）／子ども博物館 MACHmit!
- ・カトリーン・ベムケ（Ms. Katrin Boemke）／ユーゲントイム博物館協会
- ・ハンネローレ・クンツオット（Ms. Hannelore Kunz-Ott）／バイエルン州博物館委員会
- ・ベアトリクス・コマンデア（Ms. Beatrix Commandeur）／ペーパーミル産業博物館

■ドイツ語通訳：竹之内悦子氏

■引率等：

財団法人日本博物館協会の職員が分担して引率役を務めた。

なお、ドイツ派遣事業参加者や事業検討委員の方々には、それぞれ可能な範囲でプログラムにご参加いただき、プログラムの充実のためにご協力いただいた。特に、可児光生氏（美

濃加茂市民ミュージアム) および藤井麻希氏 (トヨタ博物館) には、広島・倉敷・名古屋と4日間にわたってドイツ訪問団と行動を共にされ、博物館の訪問等をサポートいただいた。

■日本での滞在先：

宿泊したホテルの名称および所在地は以下のとおり。

- ・ダイヤモンドホテル (東京都千代田区麹町 1-10-3)
- ・チサンホテル広島 (広島県広島市中区鞆町 14-7)
- ・倉敷国際ホテル (岡山県倉敷市中央1丁目1番44号)
- ・名古屋栄ワシントンホテルプラザ (愛知県名古屋市中区栄 3-1-32)

■ホームステイについて：

日本の生活・文化を体験することを目的として、博物館等の訪問のほかに、1泊のホームステイを実施した。ホストファミリーとしてご協力いただいたのは、以下の6名の方々である。平成24年11月17日(土)の夕方にドイツ派遣団と対面していただき、各家庭にご案内いただいた。11月18日(日)は、朝から各家庭で工夫を凝らしたもてなしが行われた。夕方には全員に集合いただいて、ホストファミリーとの送別会を催した。

(ホームステイ協力者)

- ・一條彰子氏 (東京国立近代美術館) / ゲストはシェーダ氏とコマンデア氏
- ・後藤文子氏 (慶應義塾大学) / クンツオット氏
- ・加藤山以氏 (社会教育実践研究センター) / バウムガルト氏
- ・佐々木秀彦氏 (東京都美術館) / ロアペーア氏
- ・木村知之氏 (相模原市立博物館) / シェーラー氏
- ・端山聡子氏 (平塚市立美術館) / ベムケ氏

■全国美術館会議教育普及研究部会との交流会について：

日本での受入事業では、美術館の教育普及担当者の集まりである全国美術館会議教育普及研究部会の会合に合わせて交流会を企画した。ドイツ派遣団7名のうち3名に事前に依頼して、ドイツの博物館教育事情に関するプレゼンテーションと質疑応答を行った。日本側の参加者は約50名であった。

2. 日本での行程

| | 月日 | 曜 | 内容（訪問先） | 宿泊地 |
|----|--------|-----|--|-------|
| 1 | 11月9日 | 金 | （フランクフルト発） | （機内泊） |
| 2 | 11月10日 | 土 | 成田着（8:35、LH710便） ホテル到着後、オリエンテーション 東京都江戸東京博物館訪問（ドイツ語ボランティアによるガイドツアー） 両国にて歓迎会 | 東京 |
| 3 | 11月11日 | 日 | 国立科学博物館訪問（ボランティアによるワークショップに参加） 国立西洋美術館訪問（ファン・デーのイベント等を見学） 浅草にて夕食 | 東京 |
| 4 | 11月12日 | 月 | 文部科学省訪問（博物館制度等について説明を受ける） 霞ヶ関にて昼食 新幹線で広島へ移動 | 広島 |
| 5 | 11月13日 | 火 | 広島平和記念資料館訪問 見学後に平和教育について意見交換（昼食を含む） 広島市こども文化科学館訪問 宮島・厳島神社を見学 | 広島 |
| 6 | 11月14日 | 水 | マイクロバスにて福山へ移動 広島県立歴史博物館訪問 福山にて昼食 マイクロバスで倉敷へ移動 | 倉敷 |
| 7 | 11月15日 | 木 | 大原美術館訪問 美観地区にて昼食 新幹線にて名古屋へ移動 | 名古屋 |
| 8 | 11月16日 | 金 | 徳川美術館訪問 館内レストランにて昼食 産業技術記念館訪問 新幹線にて東京へ移動 | 東京 |
| 9 | 11月17日 | 土 | 紙の博物館訪問 目黒区美術館訪問（昼食を含む） 夕方からホームステイ | （東京） |
| 10 | 11月18日 | 日 | ホストファミリーとの自由行動 神楽坂にてホストファミリーとの送別会 | 東京 |
| 11 | 11月19日 | 月 | 損保ジャパン東郷青児美術館訪問 新宿にて昼食の後、自由行動 | 東京 |
| 12 | 11月20日 | 火 | 東京国立博物館訪問（日本博物館協会会長への表敬訪問を含む） 館内レストランにて昼食 東京国立近代美術館訪問 | 東京 |
| 13 | 11月21日 | 水 | 川崎市立博物館訪問 蔵造りの町並み等を散策（昼食を含む） ドイツ派遣団のための内省会 国立能楽堂にて狂言を鑑賞 | 東京 |
| 14 | 11月22日 | 木 | 日本プログラムについての評価会 根津にて送別会 全国美術館会議教育普及研究部会との交流会 終了後は情報交換会に参加 | 東京 |
| 15 | 11月23日 | 金・祝 | ホテル出発、成田空港へ移動 成田発（10:25、LH711便） （フランクフルト着） | |

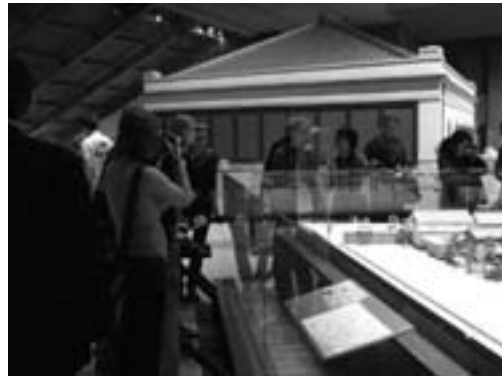
3. 行動記録

2012年11月9日(金)

フランクフルト発(13:20、LH710便)

2012年11月10日(土)

到着初日となるこの日は、日本でのプログラムのオリエンテーションを行うとともに、日本の歴史や文化に触れることを主な目的として東京都江戸東京博物館の見学を行い、また、同館近くの割烹で歓迎会をもった。ドイツ派遣団のメンバーは全員が初来日ということもあり、異文化との出会いを大いに楽しんだ。また、歓迎会には本交流事業の検討委員である後藤文子氏のほか、9月のドイツ派遣事業への参加者3名も参加し、ドイツ派遣団をもてなした。



東京都江戸東京博物館でのガイドツアー

- 08:35 成田着(第1ターミナル南ウイング)
貸し切りバスで半蔵門へ移動。
車中にてオリエンテーション。
- 11:30 ホテル着(ダイヤモンドホテル)
チェックインの後、ホテルにて昼食。
今後のスケジュール等について説明。
- 14:30 東京都江戸東京博物館を訪問。
杉谷正則参事による概要説明の後、
ドイツ語ボランティアによるガイド
のもと常設展示を見学。
- 18:00 ドイツ派遣事業参加者等も合流し、
両国にて歓迎会(割烹吉葉)を行う。
- 21:30 ホテル帰着。



両国での歓迎会

2012年11月11日（H）

この日は、日本の博物館における教育普及活動について理解するためのイントロダクションとして、本交流事業の検討委員が所属する国立科学博物館と国立西洋美術館を訪問先に選び、様々なイベントが行われている休日の博物館の様子を見学した。国立科学博物館では、一般来館者とともに草木染めのワークショップを体験することができた。国立西洋美術館では年に1度の催しである「ファン・デー」を見学することができた。ドイツ派遣団は、教育普及活動に関わって大勢のボランティアが活躍していることに驚いたようである。夕方は小雨の中を浅草へ移動し、浅草寺界隈を散策した。



国立科学博物館でのワークショップ

09：30 国立科学博物館を訪問。

本交流事業の検討委員でもある同館学習企画・調整課の永山俊介室長より概要説明を受けた後、教育ボランティアによるガイドツアー（英語）で常設展示を見学。

11：20 ワークショップ（教育ボランティアによるワークショップ「身近な植物で染めよう」に参加。

12：00 館内レストランにて昼食の後、白山見学。

14：00 国立西洋美術館を訪問。

本交流事業の検討委員でもある同館学芸課教育・普及室の寺島洋子主任研究員より概要説明を受けた後、横山佐紀主任研究員より「ファン・デー」のイベントについて説明を受け、館内を白山に見学。



国立西洋美術館での概要説明

16:45 浅草へ移動。散策の後、夕食。

20:00 ホテル帰着。

2012年11月12日(月)

この日は、日本の博物館の全体像や国の博物館振興施策について理解することを目的として、文部科学省を訪問し、説明を受けた。本交流事業の検討委員でもある青山学院大学の鈴木真理教授にも同席いただき、ドイツ派遣団の理解をサポートしていただいた。午後は広島への移動にあてた。



文部科学省社会教育課の濱部氏による説明

10:00 文部科学省訪問。会議室にて、文部科学省社会教育課博物館振興係の濱部威一郎係長より、日本の博物館法や登録制度、学芸員資格、博物館の種類や数などについて説明を受ける。

11:00 引き続き、文化庁美術学芸課美術館・歴史博物館室美術品登録調査官の松本純子氏より、平成23年度から実施が始まった「ミュージアム・エデュケーター研修」に関して、実施の経緯やプログラムについて説明を受けた後、意見交換。



文化庁の松本氏による説明

12:30 昼食

14:30 新幹線にて広島へ移動(のぞみ41号)。

19:30 ホテル着(チサンホテル広島)。

チェックインの後、夕食。

2012年11月13日(火)

日本の平和教育について理解してもらうことと、博物館の教育普及活動には修学旅行への対応という側面があることを知ってもらうために、

広島平和記念資料館を訪問した。混雑を避けるために開館時間とともに見学を開始し、見学後には平和教育について同館スタッフとの意見交換の場を設けた。また、日本の博物館の多様性を知ることが目的として、広島市こども文化科学館にも立ち寄り、館内を見学した。さらに、観光を兼ねて、日本博物館協会の会員でもある厳島神社を訪問した。



広島平和記念資料館のスタッフと意見交換

- 08:30 広島平和記念資料館訪問。前田耕一郎館長による概要説明の後、被爆体験講話の会場準備の様子や館内の展示を見学。
- 10:30 広島国際会議場の会議室へ移動。館長以下12～13名のスタッフが参加して、修学旅行生への対応やピースボランティア、平和学習講座などの説明を受けた後、平和教育への取り組みについて意見交換。
- 13:00 平和公園内散策。原爆戦没者慰霊碑や原爆ドームを見学しつつ移動。
- 13:30 広島市こども文化科学館訪問。幾田幾田擁明館長による案内の後、意見交換。
- 14:30 宮島へ移動。
- 16:00 厳島神社訪問。禰宜の福田道憲氏の案内により拝殿等を見学。
- 20:30 ホテル帰着。夕食。



厳島神社の見学

2012年11月14日(水)

広島では市立の施設を見学したが、学校教育との連携に力を入れている県立館の例として、

この日は福山にある広島県立歴史博物館を訪問した。館内では、小学生の団体が授業の一環として博物館を利用する様子を間近に見学することができた。同館職員とともに昼食をとった後、倉敷へ移動した。

- 07:30 マイクロバスにて福山へ移動。
- 09:45 広島県立歴史博物館訪問。岡田圭史館長による挨拶の後、学芸課の久下実主任学芸員による概要説明を受け、学校団体への対応状況等を見学。
- 13:00 昼食。
- 14:00 マイクロバスにて倉敷へ移動。
- 16:00 倉敷着（倉敷国際ホテル）。
チェックインの後、美観地区を散策。
美観地区にて夕食。

2012年11月15日（木）

この日は、私立博物館における教育普及活動の例として大原美術館を訪問先に選んだ。同館では未就学児童への対応にも力を入れており、当日は幼稚園団体への対応の様子を見学することができた。同館訪問の後、慌ただしく昼食をとり、列車にて岡山で移動。新幹線に乗り継いで名古屋へ向かった。

- 09:30 大原美術館訪問。学芸課長の柳沢秀行氏により、学校等の団体受け入れに関する説明を受けた後、展示棟にて幼稚園団体への対応の様子を見学。別室にて他のプログラムやスタッフの体制について追加説明。質疑応答や意見交換を行う。



広島県立歴史博物館での説明の様子



大原美術館での意見交換

- 13:00 昼食の後、倉敷駅へ移動。
- 14:10 名古屋へ移動（岡山から新幹線）。
- 17:30 ホテル着（名古屋栄ワシントンホテルプラザ）。チェックインの後、市内にて夕食。

2012年11月16日（金）

名古屋では徳川美術館と産業技術記念館を訪問した。前日に続いて、私立博物館における教育普及活動を知ることが目的としたが、大名家に伝わるコレクションや、日本を代表する企業による産業史の展示など、収蔵品の特性に応じた多様な活動に触れることができた。また、産業技術記念館の見学の後に、9月のドイツ派遣事業の参加者2名が白館について簡単なプレゼンテーションを行った。



徳川美術館での体験の様子

- 09:30 徳川美術館訪問。庭園見学の後、教育・普及担当課長の加藤啓子氏により、同館の教育普及活動の概要説明を受けた後、教育プログラムを実際に体験。
- 11:30 館内のレストランにて昼食をとった後、常設展と企画展を見学。
- 14:00 コミュニティバスにて移動。
- 15:00 産業技術記念館訪問。成田年秀副館長の案内で館内を見学。同館が週末に実施しているワークショップ等について説明を受ける。
- 17:00 ドイツ派遣事業に参加した美濃加茂市民ミュージアムの可見光生氏とトヨタ博物館の藤井麻希氏により、各館の概要や活動について説明を受け

る。

18:50 新幹線にて東京へ移動（のぞみ 180 号）。社内にて夕食。

21:00 ホテル着（ダイヤモンドホテル）。

2012年11月17日（土）

この日は、ホームステイ前の時間を目黒区美術館の訪問に当てた。なお、ドイツ派遣者のうち1名だけは、本人の希望により、紙の博物館の訪問も行った。また、派遣者のうち2名は、目黒区美術館にてホストファミリーと対面。他の5名はいったんホテルに戻ってからホームステイとなった。

10:00 紙の博物館訪問（ペーパーミル産業博物館のベアトリクス・コマンデア氏のみ）。辻本直彦学芸部長により同館の教育プログラムについて説明を受ける。

11:00 目黒区美術館訪問。降旗千賀子学芸係長より、同館のワークショップについて説明を受ける。途中、コマンデア氏も合流し、開催中の展覧会を見学。ワークショップ室にて昼食をとりつつ意見交換。降旗氏が開発した教材「引き出し博物館」を見学。

15:00 派遣者のうち2名は美術館にてホストファミリーと対面。5名はホテルへ移動。

17:00 各ホストファミリーに連れられてホームステイへ。



目黒区美術館での意見交換

2012年11月18日（H）

ホストファミリーとともに白山に過ごした後、全員が揃って夕食会を行った。夕食会では、各派遣者からそれぞれのホームステイの様子が披露された。

17:00 ホテル集合。

18:00 ホストファミリーとの夕食会（神楽坂 SHLN・本家）。

21:00 ホテル帰着。

2012年11月19日（月）

私立博物館による教育普及活動の例として、この日は損保ジャパン東郷青児美術館が休館日を利用して実施している「月曜美術館」の様子を見学した。午後は白山時間とした。

08:45 損保ジャパン東郷青児美術館訪問。
館長の原口秀夫氏の案内で、小学生の団体がバスで同館に到着するところから始まって、5人ずつのグループに分かれて作品を見学する様子を見学した後、別室にて原口館長による説明と質疑応答を行った。

11:30 新宿にて昼食。

13:00 自主研修（白山行動）へ。派遣者の大半はいったん渋谷へ移動したばかりと塩の博物館を見学。その後、原宿方面へ移動するグループと六本木方面へ移動するグループに分かれる。

18:00 ホテルに集合の後、夕食。



損保ジャパン東郷青児美術館の展示室にて

2012年11月20日(火)

この日は、日本博物館協会会長への表敬訪問を兼ねて、東京国立博物館の見学を行った。銭谷館長には同館の概要を説明いただき、また、昼食会にも参加いただいた。午後は東京国立近代美術館に移動し、ボランティアによる教育プログラム「タッチ&トーク」(工芸館)を体験し、また、独立行政法人国立美術館として実施している美術教員向けの研修事業についての説明を受けた。



東京国立博物館での概要説明の様子

- 10:00 東京国立博物館を訪問。
銭谷館長による概要説明の後、博物館教育課の伊藤信二教育普及室長より同館の教育普及プログラムについての説明を受け、館内を見学した。
- 12:00 館内レストランにて昼食をとった後、銭谷館長の案内により法隆寺宝物館を見学した。
- 13:00 地下鉄にて竹橋へ移動。
- 14:00 東京国立近代美術館を訪問。
工芸館にて、今井陽子主任研究員より「タッチ&トーク」のプログラムについて説明を受けた後、ボランティアガイドスタッフが英語で同プログラムを実施。ドイツ派遣団は、工芸資料を直接触ったり、展示室でのトークを体験したりした。
- 15:30 本館に移動し、ドイツ派遣事業参加者でもある同館の一條彰子主任研究員より「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」について説明を受け、意見交換を行った。



東京国立博物館の庭園にて記念撮影

2012年11月21日（水）

川越市立博物館は教員との人事交流を行い、指導主事として博物館に配置して学校連携に力を入れていることで有名な施設である。この日は、学校団体への対応の様子を見学するために、開館時間に合わせて同館を訪問した。館内で概要説明や見学を行った後、館外（蔵造りの町並み）で展開されているプログラムについても見学することができた。

この日の夜は、国立能楽堂にて狂言を鑑賞したが、その前に、ドイツ派遣団だけのディスカッションの時間を設けて、翌日の「評価会」に備えた。

- 09：00 川越市立博物館訪問。教育普及担当の武藤昌行主査により、会議室で概要説明を受けた後、学校団体への対応方法について、展示室での実例を前にして説明を受ける。
- 11：30 徒歩で市街（蔵造りの町並み）へ移動。昼食の後、実際の町並みを利用した学習についても説明を受ける。
- 14：00 半蔵門へ移動。ホテルにて休憩の後、千駄ヶ谷へ移動。
- 16：30 千駄ヶ谷のカフェにてドイツ派遣団によるディスカッションの時間を設ける。
- 18：00 国立能楽堂へ移動
- 18：30 狂言の会（大蔵虎明没後三百五十年記念、日本語・英語字幕付き）を鑑賞。
- 21：45 ホテル帰着。



川越市立博物館での展示室見学



蔵造りの建物にて

2012年11月22日(木)

午前中は霞ヶ関の会議室にて、本事業についての評価会（反省会）を行った。ホテルから霞ヶ関へは、皇居外周等を経由して徒歩にて移動。評価会には9月のドイツ派遣事業参加者も参加した。評価会の後は根津へ移動し、送別会を兼ねた昼食会をもった。食後は徒歩にて上野公園へ移動。東京都美術館では、全国美術館会議教育普及研究部会との交流会を行った。ドイツ派遣者3名がドイツの博物館教育に関するプレゼンテーションを行った。夕方は情報交換会にも参加し、交流を深めた。



評価会の様子

- 09：00 ホテルから徒歩にて移動。
- 10：00 本事業についての評価会（商工会館）。
- 12：30 根津へ移動
- 13：00 送別会（根津 はん亭）。
- 15：00 東京都美術館訪問。アート・コミュニケーション担当係長の稲庭彩和子氏と交流係長の佐々木秀彦氏より同館の事業について説明を受ける。
- 16：00 全国美術館会議教育普及研究部会（ERG）との交流会を実施。ERGの会員等約50名が参加。ドイツ派遣団によるプレゼンテーションを聴講。
- 18：30 ERGによる情報交換会に参加。
- 21：00 ホテル帰着。



ドイツ派遣団によるプレゼンテーション

2012年11月23日(金)

- 06：30 ホテル出発、成田空港へ移動
- 10：25 成田発LH711便にて帰国

《参考資料》

全国美術館会議教育普及研究部会との交流会（プログラム）

| Session meeting with the educators group of the Japanese Council of Art Museums 全国美術館会議教育普及研究部会との交流会 | |
|--|--|
| Tokyo Metropolitan Art Museum / Thursday, November 22 nd , 2012 東京都美術館 / 2012年11月22日 (木) | |
| 16:00～16:20 | Ms. Akiko Ichijo 一城あき子 Report of the experiences in the German Program ドイツ派遣事業への参加報告 |
| 16:20～16:30 | Questions and Answers 質疑応答 |
| 16:30～16:50 | Ms. Hannelore Kazuo Oki ハンネローレ・カズオ・オキ Quality criteria of museums: Education and mediation 博物館のための品質基準：教育とメディアーション |
| 16:50～17:00 | Questions and Answers 質疑応答 |
| 17:00～17:20 | Ms. Marie Loebner マリー・ロアバーナー DVD with pictures: 15 / 20 years of the "MACHMit! Museum" (JONNA! Museum for Children) in Berlin 写真による40分：ベルリン「マフミット」子ども博物館 15年の活動 |
| 17:20～17:40 | Ms. Nicole Schoda ニコル・シェーダ Museum education should feel like "free time" not like "school" 「学校」ではなく「自由時間」のような博物館教育について |
| 17:40～17:50 | Questions and Answers 質疑応答 |

ドイツからの
訪問団が来川



ドイツの博物館や美術館で教育支援をしている皆さんが、11月21日に川越のまちと市立博物館を訪れ、日本の現状を視察しました。「博物館で模型を見て学び、まちで本物を見るというシステムが、町全体でできることは素晴らしいですね」と訪問団団長のヘアトリス・コマンアアさん。



「広報川越」No. 1284（2012年12月10日発行）より

4. ドイツ派遣団からのコメント（評価会より）

ドイツ派遣団の帰国前日にあたる平成24年11月22日（木）の午前10時から、日本プログラムに関する「評価会」を実施した。この前日（11月21日）にはドイツ派遣団だけのディスカッションの時間（内省会）を設けており、そこでの調整を経て、各団員がそれぞれの関心領域を限定してコメントするスタイルが採られた。日本側からは、日本博物館協会職員3名（半田、新妻、守井）と、ドイツ派遣事業参加者4名（可児、一條、倉成、藤井）が出席し、必要に応じて意見や回答を述べた。

以下にドイツ団による発言内容を収録する。初めに派遣団を代表してベアトリクス・コマンデア氏が日本プログラム全体について感想や意見を述べた後、他の6名が個別のテーマ（ボランティア、未就学児童、学校との連携、博物館の評価と研修、質の保証、平和教育）に即して順に感想や意見を述べた。最後は再びコマンデア氏によって、まとめが行われた。

■日本プログラム全体について（ベアトリクス・コマンデア氏）

- ・今は滞在中のいろんな印象が押し寄せている感覚。
- ・日本では、変化に富み、面白いプログラムを多く知ることができた。
- ・日本の博物館の教育形態は多様であった。エドゥケーターだけでなく、学芸員や学校教員、ボランティアの人々など、様々な形で様々な人々が関わっていた。
- ・日本からドイツに派遣された団員との再会はとても重要であった。ドイツでの交流が日本で更に深められたことは大きな意義があった。
- ・日本の食文化を体験出来たことも良かった。またホームステイの体験も忘れがたいものとなった。
- ・日本の博物館教育について理解するには、表面的な知識、情報だけではわからない。その背景である日本の社会、学校、子どもたちなどの現状を知ることの必要性を感じた。
- ・プログラムを組むにあたっては、行程の最初の段階で、訪問する館の個々の紹介があると良いことがわかった。
- ・ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP）としては、日本からの派遣団の受け入れは初めての経験だったので、事前に派遣者に関する情報がもう少しあると良かった。
- ・日本プログラムについては、1日に1時間程度でもよいので団員同士が話し合いをする時間があると良かった。

■ ボランティアについて（ペーター・シェラー氏）

- ・日本の博物館を訪問して一番驚いたのは、ボランティアの存在と活動である。
- ・ドイツではボランティアがないことが問題となっている。教育担当者の専門性を重視することから、導入が難しい状況がある。
- ・日本におけるボランティアの歴史や現状、考え方についてももう少し詳しく知りたいと思った。

■ 未就学児童について（ビルギット・バウムガルト氏）

- ・自分は未就学児のことに興味をもって来日した。
- ・大原美術館などで、多くのプログラムが行われていた。
- ・創造性を育てるプログラムも多いと感じた。
- ・日本では博物館における幼児教育について、何らかの指針があるのかどうか、詳しく知りたいと思った。

■ 学校と博物館の連携について（ニコル・シェーダ氏）

- ・両国の表面的な違いは、ドイツでは子どもたちが「てんでばらばら」で白山、日本ではいつも制服を着て2列に並んで整然としている。ドイツではスタッフが1人しか付かないが、日本では複数のスタッフにさらにボランティアが付く。組織だった形も良いが、白山に学ぶ余地も欲しい。
- ・今ドイツで考えられている能力や適性の概念として「コンペテンツ」がある。ドイツでは博物館はかつて、知識重視であった。しかし今は、どのように知るかが重要になってきている。具体的には、①手作業など実用的能力、②自分にあったものや方法を選び出す能力、③判断する能力、④それらを行動に移す能力などがあげられる。日本では、例えば川越市立博物館で見たように、学校教育をサポートする、知識を与えることに重点が置かれている。一方ドイツでは、自分の意見を作り上げていくところに重点を置いている点が対照的である。

■ 博物館の評価と研修について（ハンネローレ・クンツオット氏）

- ・日本に来て、可児さんと藤井さんから博物館の評価について少し話を聞くことができた。
- ・効果の評価について。例えば展示については、①予備評価、②展示中の評価、③展示後の評価と、3段階の評価があると考えられている。日本では各段階の評価がどのように行われているか知りたい。
- ・職員の研修について。ドイツでは教育普及に関する研修を大学での科目に入れたいと長年努力してきたがまだ実現していない。日本との情報交換によってそれを進めていくことが出来たら良いと思っている。

■博物館の質の保証について（カトリーン・ベムケ氏）

- ・評価とか教育の問題と関連があるが、自分の関心は博物館の質の保証について。
- ・博物館の質を測るための判断材料として、数字で測れるもの、例えば入館者数などがある。
- ・数字で計れないものとして、ハンズオンの活動などがあるが、ある博物館ではスタンプを押すことをハンズオンとして紹介された。しかし、その行為の内容が、質的な意味で効果があるのかどうか疑問を感じた。
- ・ドイツ連邦博物館教育連盟では、何年か前に「博物館のための品質規準」が作られた。この内容については今日の午後にハンネローネが報告する予定であるが、その規準も今や、年数が経って、見直しの時期を迎え、議論が行われているところである。
- ・日本では博物館教育の質を判断するための規準があるのかどうか。もしくは、規準を作ろうとする動きがあるのかどうか。是非参考にしたい。

■平和教育について（マリー・ロアペーア氏）

- ・広島を訪問し、平和教育についての様々な形を見た。ドイツとの違いを感じた。
- ・ドイツでは人種差別反対、ナチズム反対、といった個別の教育プログラムが様々行われており、施設も多くあるが、日本では総合して平和教育としてまとめられている。平和には、人間同士が共存するという面と、国同士の平和という面と、2つの側面がある。ドイツでは個々に特化されてしまっているが、日本での経験をもとに、「平和教育」という大きな括りの中でドイツの形を考えてみる必要があると感じた。
- ・日本で学校の先生が博物館の教育にたずさわっていることは良いことだと感じた。

■まとめ（ベアトリクス・コマンデア氏）

- ・ドイツ側から様々な問題が提起された。今後のディスカッションで更に深まることが期待される。
- ・我々の連盟は連邦レベルの組織であるが、州単位の下部組織もある。半田さんから、博物館教育に関するこのプログラムは重要であり、2013年以降も何らかの形で継続させていきたいとの発言があったが、日本でも博物館教育にたずさわる人たちのネットワーク化が進み、私たちのパートナーとなって、議論や協力や交流がさらに深められることを願っている。

第4章 ドイツ派遣者のレポート

1. ドイツの博物館における青少年教育

～ドイツ派遣事業に参加して～

美濃加茂市民ミュージアム 可児光生

日本博物館協会によって実施された平成 24 年度日独青少年指導者セミナー「博物館にける青少年教育」におけるドイツ派遣事業に参加して、平成 24 年 9 月 13 日から 27 日までの 15 日間にわたって、ドイツ連邦共和国の首都ベルリンと、西部のケルン周辺の博物館、約 20 館を視察する機会を得た。この派遣事業への参加者は、筆者を含め日本国内の博物館に勤務する学芸員やエドゥケーター 7 名である。

このたびの視察を通して我々がドイツで体験したことはあまりに多く、まだ十分に消化できていない感がある。視察した個々の博物館等については、派遣者 7 名が分担して作成した個別のレポートをお読みいただくとして、まずは、全体的な特徴や印象について、筆者なりに理解したことをいくつかの項目に整理して記す。「雑感」の域を出ないものであるが、参考にしていただければ幸いである。

《支える人々》

- ◇博物館教育普及の仕事は、日本と同様、個人の熱意に支えられている部分が多い。バイタリティーあふれる女性の姿が目立った。
- ◇ドイツでのエドゥケーターの存在は、学芸員と比べて認識や地位がかつては低かった。しかし、博物館教育の必要性や来館者重視といった社会的背景のもとに、エドゥケーターは充実したプログラムを実施して実績を上げ評価を得た。また、博物館側から行政などに対して積極的に働きかけを行い、議会や自治体などからの支援も得て認知度が上がった。現在は、エドゥケーターの地位は学芸員と肩を並べるまで向上してきている。
- ◇ドイツでの博物館教育普及の一番の柱はガイドツアーという形態(2007 年調査では 90%のミュージアムが実施)である。ガイドツアーを行う人は、日本にしばしば見られるボランティアではない。プロフェッショナルな人々(正規職員ではなく非常勤やフリーランスが多い)がそれを担い、プライドをもって実施されている。
- ◇博物館の外部に、教育普及に関わる社団や財団の組織があり、教育普及業務が館からそこに委託される例が多い。ガイドツアーやワークショップの業務はその組織から派遣されたスタッフ(アーティストなど)が行う。高い質のプログラムが提供できることが特徴である。館とその外部組織は常に情報を交換し、お互いの信頼関係はしっかりしている。
- ◇日本では教師が現職のまま博物館へ派遣され教育普及活動を担うことがしばしば見られるが、ドイツではそのような形態は一部(ケルン市)を除いてあまり行われていないようであった。

《社会的課題への関わり》

- ◇「子どもの人権」や「民族・移民」をテーマにした子どもの博物館が多くある印象を受けた。そのような事項について幼少時から積極的に取り組む状況がみられた。また博物館で、他の民族や文化を紹介する際、その違いを追求するのではなく、お互いの共通することから気持ちや、展示を通して見いだそうとする理念が印象的であった。
- ◇現代史に関する博物館も多く、子どもに対しても正面から歴史事実をしっかり伝えていた。展示室においてのディスカッションを通して、主体的にまた批判的に考えさせる手法が見うけられた。民族間の抗争や国の分断といったドイツの歴史的背景があるからであろうが、歴史を教訓とするという一貫した基本的姿勢を感じた。日本では平和教育以外、現代の歴史教育と博物館をつなぐ活動がそれほど活発に行われていないことと比べて対照的であると思う。

《教育・サービス》

- ◇前述した教育普及業務にたずさわる外部財団が実施するプログラムは、「教育」部門と、人々を楽しませる「サービス」部門、「広報活動」部門にまたがっており、それらに明確な境界がない印象を受けた。博物館として対外的コミュニケーションに関する領域を総合的に担っているように思われる。
- ◇博物館で「誕生日会」が開催されているという情報を多く得た。特別な展示ガイドツアー、パーティーなどがその内容である。ドイツに限らず欧米などでは時々見られる例かもしれないが、博物館が人々のふだんの生活のなかに普通に使われ、暮らしにとけこんでいることがわかった。日本のように「公」と「私」の線引きを強調するのではなく、社会や地域に対しておおらかで開放的である。

《問題関心》

- ◇ドイツの博物館では、かつては知識重視だったが、ここ10年くらいは「博物館でどのように知るか」や「博物館を利用した後どのようになるか」という側面が注目されてきている。その能力は、例えば、社会性、文化性、創造性、質問・問題意識、自分で学習にアプローチする、という力「コンペテンツ」(Kompetenz)である。「博物館は社会の中で人として文化的に生きる力を養うところ」と言えるかもしれない。
- ◇博物館での教育の品質管理、効果測定や評価については、日本同様これから取り組むべき課題の一つであると感じた。

《印象的発言》

- ◇「エドゥケーターの仕事とは、一度博物館で学んだ子どもが、又いずれその博物館でもしくは社会全体で学んでくれるようにすること」(Mr. Lutz Lienke)
- ◇子どもたちにとって「さまざまな文化体験は一生のリュックサックになる(文化リュック)」(デュッセルドルフ、ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館)

(以上)

2. ドイツ連邦博物館教育連盟について

トヨタ博物館 藤井麻希

日本博物館協会によって実施された平成 24 年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」のドイツ派遣事業において、ドイツ側のカウンターパートを務めたのがドイツ連邦博物館教育連盟(Bundesverband Museumspädagogik e.V.、略称は BVMP)である。我々派遣団のために視察等のプログラムを準備し、全行程にわたって様々な配慮をいただいた。

ドイツ滞在中(2012 年 9 月 22 日)に、同連盟の会長である Ms. Anja Hoffmann から組織の歴史や活動内容について説明いただいた。以下はその内容をまとめたものである。

1. 歴史と構成

ドイツ連邦博物館教育連盟(Bundesverband Museumspädagogik e.V.)は、教育普及担当者が集まってできた組織である。それぞれの館の担当者が、教育普及の質の向上のために集まったのが最初であるという。各州に連合ができ、1991 年に設立された。

理事会があるが、皆、名誉職で専任はいない。役員報酬はない。

会長は総会で選出され、任期は 3 年。活動が継続できるように、2 回までは再選可能。理事会は会長、副会長、会計担当、情報担当以下、顧問 6 人で構成される。

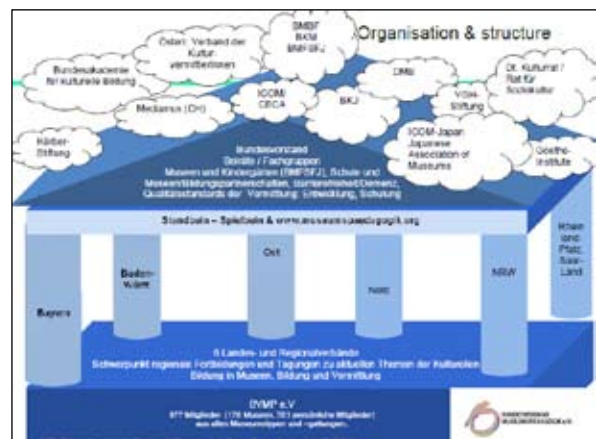


Ms. Hoffmann による説明の様子

2. 会員数と連携相手

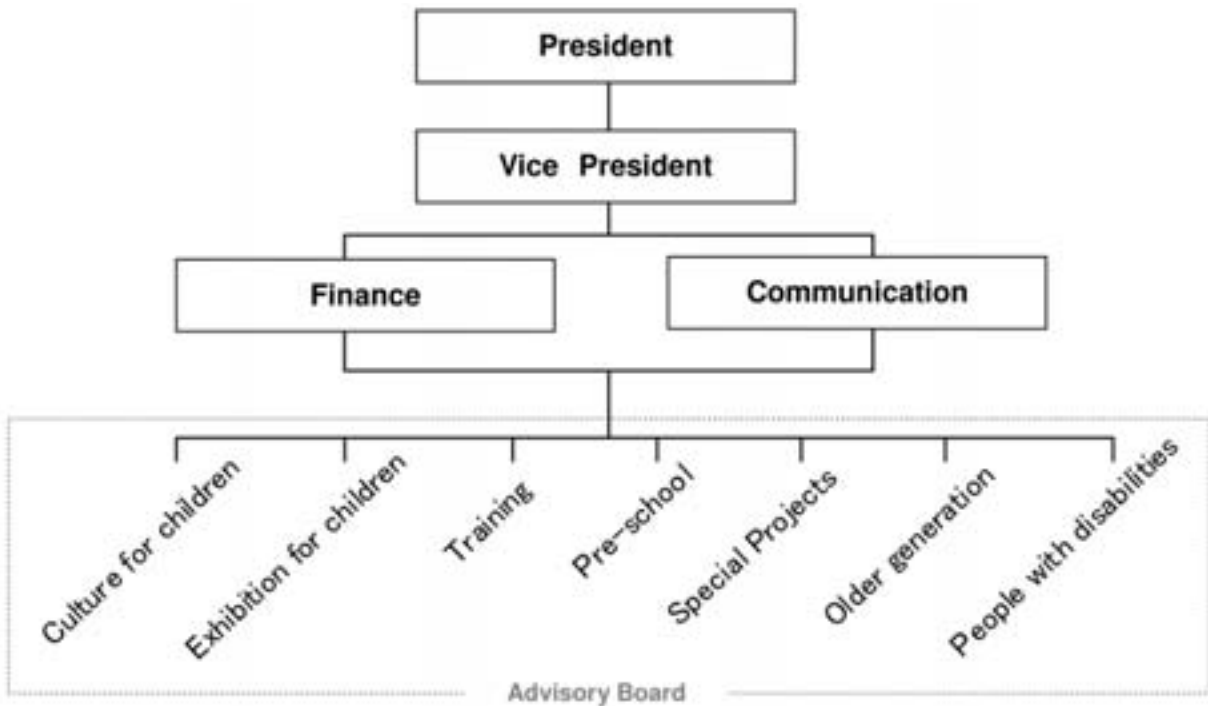
現在のメンバー数は 877 である。このうち博物館会員が 176 館で、個人会員(博物館で働く専任スタッフ、フリーランス、大学生などのエデュケーター)が 701 人である。

国際博物館会議の教育普及国際委員会(ICOM-CECA)やドイツ連邦文化青少年教育協会(BKJ; Bundesvereinigung Kulturelle Jugendbildung)、ドイツ連邦文化青少年教育協会など、10 団体と連携している。



連盟のイメージ図

連盟の組織図



3. 活動

最近のテーマはバリアフリーとのこと。高齢者、移民、ハンディキャップをもつ人、全ての人が教育文化に親しめる環境をつくるのがテーマとなっている。

機関誌を年3回発行しているが、そのタイトルは『Standbein/Spielbein(軸足/軸足でない足)』である。ケンケン(片足跳び)をイメージしてもらえると分かりやすいが、軸足はしっかりと地に着け、軸足でない足を動かす。一方でしっかりと地に根付いた活動をしつつ他方では新たな実験をする、という意味が込められている。

またドイツ連邦博物館教育連盟では、博物館における教育普及活動の質の向上をはかるために、「Qualitätskriterien für Museen」(英訳すると quality criteria for museum)と題する小冊子を発行している。



小冊子「Qualitätskriterien für Museen」

【参考URL】

ドイツ連邦博物館教育連盟のウェブサイト(ただしドイツ語のみ):

<http://www.museumspaedagogik.org/>

3. ドイツで訪問した施設等について

ドイツプログラムにおいて視察の機会があった博物館等について、施設の概要や活動内容について個別に報告する。各レポートは派遣事業参加者7名が分担して作成した。レポートのタイトル(訪問先)と報告者の氏名は以下のとおりである。なお、ボン国立博物館では、ノルトライン=ヴェストファーレン州で組織されている博物館教育連盟の会合に出席した。この会合についてもここで報告することとする。

<訪問先>

- ① ドイツ歴史博物館(ベルリン)
- ② バウハウス資料館(ベルリン)
- ③ ベルリン近代美術館
- ④ ベルリン国立博物館 絵画ギャラリー
- ⑤ 子ども博物館 MACHmit! (ベルリン)
- ⑥ ベルリンの壁記念センター
- ⑦ ドイツ連邦議会議事堂
- ⑧ ケルン市博物館顧客サービスと
ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館
- ⑨ シュニユットゲン美術館(ケルン)
- ⑩ ベンラート宮殿公園(デュッセルドルフ)
- ⑪ ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館(デュッセルドルフ)
- ⑫ 子ども博物館 Mondo Mio! (ドルトムント)
- ⑬ 鉄と鋼の博物館(ハッティンゲン)
- ⑭ ペーパーミル産業博物館(ベルギッシュグラッドバツハ)
- ⑮ ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)
- ⑯ ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟
- ⑰ リンドラー野外博物館
- ⑱ ゴーリンゲン産業博物館

<報告者>

- 可児 光生
一條 彰子
倉成 多郎
秋山 幸也
鈴木 里和
鈴木 里和
倉成 多郎
- 可児 光生
西田 亜未
秋山 幸也
一條 彰子
鈴木 里和
藤井 麻希
藤井 麻希
可児 光生
西田 亜未
秋山 幸也
藤井 麻希

①ドイツ歴史博物館(ベルリン)

Deutsches Historisches Museum

訪問日時:2012年9月14日(金) 14:30~17:00

対応者:Dr. Drothea Parak (エドゥケーター、歴史学者)

1. 概要

ドイツ国内で一番規模の大きな歴史博物館である。元々はプロイセン武器倉庫であり、また、軍隊歴史博物館であったこともあって、建物自体が博物館となっている。1987年に「ドイツ歴史博物館」として発足し、1992年リニューアルオープン。このほど25周年を迎えた。B.C.1世紀から現在までのドイツ史を扱っており、かつての戦利品など、例えばオスマントルコ時代のテント、ナポレオン関係のものなどが展示してある。

年間入場者数は約70万人である。入場料は、18歳までは無料、大人は8ユーロ。ガイドツアーの料金は、一般子ども共通で1人4ユーロ、団体は75ユーロである。ただし、学校やクラス単位として観覧する場合は1人1ユーロである。

ガイドツアーのプログラムは50種類ほどあり、1日に何回も実施することがある。歴史系と美術系の14名がエドゥケーターとして勤務しているが、専任スタッフであっても雇用は2年間の期間限定である。Dr. Drothea Parakもその1人である。エドゥケーターはガイドツアーだけでなく、教員に対するレクチャーや研修も行っている。

なお、エドゥケーター自身の研修については、大学などにその場所や機会があるわけではなく、博物館の中に養成プログラムが準備されているとのことであった。また、ガイドツアーなどの教育プログラム実施後の効果や評価については、大学との連携がスムーズにできたかどうかのチェックはあるものの、プログラムの内容についての検証などは特に実施していないのが現状である。

2. 展示

2階の展示室へのアプローチである階段踊り場と観覧後の下り階段の踊り場の2ヶ所に、複数の人物の大きな写真パネルが設置してあった。人物のそばには、見る方向によって見え隠れする数字が記してある。その数字が何であるのか、写真の内容とは直接関係ないようにも思われる。それは年齢かもしれない。家族の人数かもしれない。人物と数字を見つめていると、両者の関係性やその背景を考えると、不思議な空間であった。一つの歴史資料に対して、その解釈はそれぞれ観覧者に任せる、多様な価値観を認めるという博物館の展示姿勢が伝わってくる象徴的展示であった。

同館の展示を学校から団体で観覧する場合も多くある。その時、子どもたちの関心の高いテーマは「中世の騎士」「合戦」についてであるという。展示資料に複製品はほとんどなく、展示室はほぼオリジナル(実物資料)で構成されている。



鎖帷子(くさりかたびら)



デジタル化された古文書

学習のためのツールとして興味深かったのは「鎖帷子(くさりかたびら)」(複製品)であった。実際に持ってみたり、着てみたりして、その重さが実感できるものであり、当時の騎士の気分になれる。また、貴重な古文書をデジタル化してバーチャルな画像で見せるアーカイブ的な装置があり、来館者に史料をとおして関心を持たせる工夫がしてあった。古文書の展示は一般的に、原資料を展示し、その脇に釈文と解説文で説明するパターンに陥りがちであるが、このような展示は、史料の見方やその持つ意味を考えさせるものとして参考になるものであった。

展示室の壁の色は、時代ごと(例えば 1600 年から 1650 年、1650 年から 1740 年)に色が変わってあった。それは当時の社会で人気のあった色を調査し、そのイメージで展示空間をつくるという工夫であるという。

3. 子ども向けの対応

見学中に、ワークショップの準備をしている大学生のグループを見かけた。小学生(5 年生、6 年生が主体)向けのプロジェクトの指導者であるという。子どもたち 10 人程度が選ばれ、1 年間同じテーマでワークショップが行われる。関わるのは、博物館と連携している大学の文化マネージメントを専攻する学生たちである。展示してある歴史的背景のある絵画作品をもとに、それをじっくり鑑賞、観察した上で、一つのストーリーを作り、思い思いの衣装やかつらなどで作品を



絵画からストーリー

作り上げ、一般来館者の前でプレゼンテーションをするというものであった。この博物館では、絵画作品(例えばナポレオンの肖像画)を単に鑑賞するのではなく、描かれている個々のものからその背景にあるものを考えさせることに力点が置かれていた。歴史的観点から、絵画の持つ機能をで

きる限り引き出そうという姿勢が感じられた。

1階の展示室は、現代の展示空間であった。ヒトラー内閣成立から東西統一までの歴史である。ナチ時代に迫害を受けた、あるユダヤ人の伝記の展示品があった。ヒトラーが街頭で演説する映像が流されていた。展示室内ではそれらを題材に子どもたちと長時間ディスカッションの時間が持たれる。歴史的事象を直視し多くの議論を経、その結果、当時のプロパガンダを冷静に検証し、批判的に解釈していく力がついていくとのことであった。

(可児光生／美濃加茂市民ミュージアム)

②バウハウス資料館(ベルリン)

Bauhaus-Archiv / Museum für Gestaltung, Berlin

訪問日時: 2012年9月15日(土) 14:00-16:00

対応者: Ms. Barbel Mees (コミュニケーション担当)

1. 概要

バウハウスは1919年から1933年まであった芸術学校である。ワイマール共和国成立直後の自由な雰囲気の中で創立され、ナチの弾圧によって閉校させられた。ヴァルター・グロピウス、ハネス・マイヤー、ミース・ファンデルローエの3代の校長のもと、革新的な美術教育を展開した。

バウハウスは、そのキラ星のごとき教授陣(クレー、カンディンスキー、イッテンなど)や、モダン



バウハウス資料館エントランス

デザインのプロトタイプであるインテリアと建築によって、日本でもよく知られている。そのせいか、このバウハウス資料館は比較的小規模な施設であるにもかかわらず、学生をはじめとする日本人観光客の姿がちらほら見受けられた。私自身は、東京・池袋にあったセゾン美術館で1995年に「バウハウス展」が開催された際にアシスタントキュレーターとして関わったので、久しぶりにバウハウス資料館を訪れることができ感慨深かった。18年前は、教育活動はほとんど行っていなかったはずである。

2. ギャラリーでの展示解説

バウハウス資料館の教育担当者は、ビクターサービスや広報を兼任する職員1名体制だが、社団法人“Jugend im Museum e.V.”(英訳はyouth in the museum)より7人のフリーランス(子ども担当1~2人、ガイドツアー5人)の派遣を受けて、教育活動を展開している。担当のミースさんは、子ども向けの教育ツールが入ったカートを引き連れて現れ、展示解説を行いながら、3つのアクティビティ(以下A



入口付近には子どもの遊び場がある

～C)をギャラリーの中で実施してくれた。バウハウス資料館にはワークショップルームが無いので、教育活動はギャラリー内か、外のテラス部分で行っているようだ。

なお、ギャラリー内の撮影が許可されなかったため、残念ながら写真を添えることができない。

3—A. 触覚のアクティビティ

バウハウスの特徴として、入学後約2年間、必修となっている「予備課程」が挙げられる。ここで色や線、構成、材質などについての基礎教育が徹底的に施され、その後初めて陶器、織物、金属、家具、壁画、版画、広告、写真、舞台の各工房での専門教育を受けることができる。

バウハウス資料館のコミュニケーション担当であるミースさんが我々に最初に紹介してくれた教育プログラムは、この予備課程で実際に行われていた「材質の違いに注目する授業」を、幼児向けにアレンジしたものだった。5×10cmほどの触感の異なる素材チップ(スポンジや人工芝、ビロードなど)7、8枚を並べて、細長いダンボールに貼り込み、その上を指で歩くようにして、触感の違いを楽しむ。または、ガラスや石、金属など、異なる材質でできたボールを触って、その手触りを説明する。

これらは、保育園との連携で5回にわたって行われることが多い。初回は必ずギャラリーで行い、その後の4回は、保育園にエドゥケーターが出向いて行う。子どもたちには、対象を良く見て考え、分析的・意識的に説明することを促す。これは、移民が多いベルリンで、ドイツ語教育としての役割も併せ持っているということだった。

3—B. 線のアクティビティ

3人の歴代校長が建築家であることからわかるように、バウハウスは建築教育を重要視していた。建築模型の並ぶ展示室では、建築の主要な造形要素である「線」に着目したアクティビティが行われた。たとえば、1メートルほどの、両端に穴のあいた塩ビ製パイプを、リングと結束バンドでつなげる。最低3本あれば自立するので、組み合わせれば簡単に建築物ができる。また、3メートルほどの赤い紐を床に置いて、さまざまな曲線を作ってみる。これらのアクティビティで、「コントラスト」「シンメトリー」「バランス」についても学ぶことができるのである。



マルセル・ブロイヤー「椅子」1928年

3—C. 椅子のアクティビティ

バウハウス・デザインとして有名な、マルセル・ブロイヤーによるパイプ椅子。ミースさんは30センチほどの針金と布テープを配り、ミニチュア椅子を作らせた。針金を木製ブロックにあてて曲げると、きちんと直角に曲がる。なるほどこのようにすれば、ひとつながりのパイプと少々の布で、椅子ができることがよくわかる。展示されたオリジナルの椅子をよく観察することにも繋がる。出来上がったミニチュア椅子は、各自お土産として持ち帰ることができ、我々にとつ

でも良い記念となった。

4. 専門職員や制作室が無くても、教育活動が可能なくみ

エドゥケーターを自前で持たず、ワークショップルームの無い、比較的小さなこの資料館でも、コレクションに基づいた基本的な教育プログラムを持っており、社団法人のサポートを受けながら保育園との連携も行っていることに対して、新鮮な驚きを感じた。フリーランスを派遣する組織と連携するという発想は、同じように設備や人材面で悩む日本の博物館にとって、大いに参考になると思われる。

(一條彰子／東京国立近代美術館)

③ベルリン近代美術館

Berlinische Galerie / Museum für Moderne Kunst

訪問日時: 2012年9月17日(月) 午前

対応者: Ms. Ulrike Andres (広報担当)、Ms. Katrin Boemke (JIM 理事)、
Ms. Song Hee Lee (JIM からの派遣者)

施設概要:

ベルリン近代美術館(以下 BG)は 1870 年代以降の芸術作品を収集する現代美術専門の美術館である。組織自体は 1980 年代に発足していたが、2008 年に、廃業したガラス製品の倉庫を改装し BG として活動を開始した。4500 m²の展示スペースを有する。造形芸術・グラフィック・建築・写真・アーカイブの 5 部門でコレクションをおこない、60 名の職員が勤務している。

美術館へのアプローチには、芸術家の短い言葉や美術館の情報がプリントされたフラッグが設置され、また美術館前広場の床面は、黄色いペイントで無数のアルファベットを書き込む作品になっている。この作品は、アルファベットは一見ランダムのように見えるが、つなぐと作品を収蔵する作家の名前のつづりになっている。視覚的にも鮮やかで来館者の目を引いている。



アプローチのフラッグと館前庭



教育普及:

BG では、教育普及を「Jugend im Museum e.V.」(以下 JIM)という団体に委託している。「Jugend im Museum」は、「若者を博物館へ」という意味のドイツ語であり、「e.V.」は、eingetragener Verein の略で、日本の社団法人に相当する。ドイツの小学校の多くは半日制で、JIM は、40 年前に子供たちの放課後支援組織としてスタートした。博物館の教育普及活動は、生徒たちの放課後活動のひとつでもあり、その中で学校とは違う教育の場が追求されてきた。

ただ、近年ドイツでは、学校が全日制に移行しつつあり、その変化を受けて博物館の活動も転換点にあるとの発言があった。

JIM は BG 内でのワークショップの開催を支援している。5 名の芸術家を BG に派遣し常駐させている。派遣された作家は美術館内のアトリエを利用してワークショップの準備をする。活動内容は造形芸術だけにとどまらず、音楽・ダンスなど広範囲にわたる。家族向け、子供向けのワークショップを提供していたが、現在ターゲットが多様化している。JIM の財政基盤は、公的な助成、州からの援助、子供たち(参加者)からの一部負担、支援メンバー(450 名)による年会費約 4000 円によっている。

BG でのワークショップ

BG で行われているワークショップ(以下 WS)について、韓国系ドイツ人 Ms. Song Hee Lee (JIM からの派遣で館内にアトリエをもち、教育普及活動に従事する)から説明を受けた。まず企画展に関連しての WS の説明を受け、その後、常設展示で行われる二つの WS に実際に参加した。

Ms. Song Hee Lee は歴史・美術史を学んだわけではなく、一応アーティストに分類されるが、本人からは自分はアーティストではないという発言があった。

●企画展での WS

BG 内では Alfredo Jaar による「ルワンダの虐殺」をテーマとした企画展が行われていた。この WS については担当者 Ms. Song Hee Lee からの口頭説明と WS の様子を映した映像を見学した。内容は、「ある日、両親がいなくなる。理由はわからない。」というストーリーで、子供たちが音のない映像を作っていくというものである。

Alfredo Jaar の展示会に関する WS は、展示内容と密接に関連している。両親の突然の不在という事象から、最終的には「虐殺」という事実にとらされる。作品理解というよりも、作品が伝えなかったメッセージを別の角度から伝える WS だった。



「Alfredo Jaar The Way It Is」前で説明する Ms. Song Hee Lee

●常設展示を使った二つの WS

常設展示を使った二つの WS に参加した。

(1)参加者を AB2グループに分ける。A は「展示会を見る人」、B は「A の中の一人を観察する人」。A のメンバーは常設展示の作品を鑑賞する。B は A の中の一人を選んで観察・記録し、その後その記録を観察した人に伝える。主観・客観、自己認識を考える趣旨であるという説明があった。

(2)常設展示室内の作品(1870年以降の現代芸術作品)から、作品の中の一部から「モンスター」に似ているような箇所を探させる。その一部を組み合わせて自分だけのモンスターを作る。

常設展示の二つの WS は、直接的には常設展示の構成や展示品・展示内容とは関連しない内

容で、企画展のWSとは対照的だった。

Ms. Song Hee Lee あるいは他の普及担当者のWSは独立性が高いという印象を受けた。展示内容から独立し独自のWSを展開できる、作家やその意図からも独立して作品を使ってさまざまな遊びをするWSを展開しており、博物館からの干渉も多くはなさそうだった。

ドイツでは、博物館という建物を結節点に、さまざまなベクトルが多層的に重なり合っているという印象を受けた。調査研究者の意図、展示構成者の意図、全体のマネージャーの意図、そして普及担当者の意図が相互に独立性をもったままさまざまな活動を行い、特に教育普及活動者の独立性が認められているという印象を受けた。

感想

展示室内でワークショップを行う際、一般の観覧者がいる中で、展示室中央で車座に座り、普通の音量でワークショップの内容説明やディスカッションを行っていたが、他の観覧者は、それについて寛容な態度をしめしていたのが印象的だった。

アーティストや外部の団体がワークショップを担当すると、博物館を基点としながらも、非常に独創性にとんだ活動になる。常設展示が示す方向性とは無関係の、あるいは別の角度からのアプローチがなされ、鑑賞の方法にも多様性が生まれると感じた。

ドイツでは博物館側のアイデアを実現させる支援組織のネットワークが非常に豊かである、という日本側参加者の感想があった。



WSの様子



【参考URL】

ベルリンギャラリーのウェブサイト: <http://www.berlinischegalerie.de/>

Jugend im Museum e.V. のウェブサイト: <http://www.jugend-im-museum.de/>

(倉成多郎／那覇市立壺屋焼物博物館)

④ベルリン国立博物館 絵画ギャラリー

Gemäldegalerie, Staatliche Museen zu Berlin

訪問日時: 2012年9月17日(月) 午後

対応者: Ms. Ines Bellin、Ms. Anja Birkel

1. 予想外の大きさ

当初の予定では、この日はペルガモン博物館を訪問することになっていたが、周辺の工事の音がうるさいためとの理由で、予定を変更して絵画ギャラリーへ行くことになった。それを知らされたのはベルリンに着いた翌日、ベルリンでのプログラムの説明会だった。

博物館島の5館のうち、どこへ入るか迷ったらペルガモンへと言われるほどの、ベルリンを代表する博物館への訪問が無くなり、派遣団のメンバーは内心がっかりしていた。その替わりが、絵画ギャラリーとのこと。日本では、ギャラリーは画廊と訳され、街角の展示室といった小振りなイメージである。少々モチベーションが下がり気味で目的地へ着いたのだが、その外観は我々のイメージを覆す大きさであった。つまらない先入観を即座に捨て去って意気揚々とした気分で館内へ入った。

しかも、この日は月曜日である。博物館施設に月曜休館が多いのは日本と同じらしく、このギャラリーも休館日だった。しかし、私たちのために展示室を開けてくれるという。その厚遇も大変嬉しく感じた。

2. 贅沢な鑑賞の時間

案内して下さったのは、国立博物館群の中にある市民のためのサービスを司る部署に所属する、教育普及担当のベリンさんとビルケルさんである。美術史を専攻する研究者でもあるビルケルさんは、展示されているすべての作品についてガイドし、質問に答えられるように日々研鑽しているという。実際にその説明は、時に細部にわたり、時に作品のサイドストーリーである作家の人生を語り、聴いている側を飽きさせないものだった。



絵画ギャラリーの外観



展示室でのガイドツアー

展示室へ入り最初に案内されたのは、ルーカス・クラナッハが 16 世紀に描いた「若返り」という作品である。若返りの泉に浸かった老婆が次々と娘へと若返っていくようすを描いている。登場人物の多い大きな作品であるが、よくよく見ると若返って喜びに満ちた初々しい少女の表情や、泉の中央を境に頭が少女、下半身が老婆とまさに変身途中のようすまで細かく描き込まれている。寓話的な作品世界を、ちょっとコミカルに紹介するビルケルさんの解説に引き込まれた。ちなみに、描かれているのが女性だけなのは、男性はその愛によって若返るという深い意味が隠されているとのこと。聴衆に、ほおとため息をつかせる締めくくりだった。

展示室を進み、レンブラント、ブリューゲル、フェルメール、カラヴァッジョと名だたる画家の作品を独占して鑑賞するという贅沢な時間を過ごした。実際に子ども達へこの展示室で作品をガイドする場合は、おおむね1時間、3作品に絞って解説するとのことだった。

3. キンダーアカデミー

絵画ギャラリーでは、子ども達が美術を身近なものとして感じられるように、学習室が設けられていた。その入り口には、指の爪ほどの大きさの絵画作品が並んでいる。服飾用に実際に描かれた作品であるが、ここでは子ども達へ、「大きな絵と、こんなに小さな絵と、どちらが描くのが難しいだろう。」という問いかけをして、絵画を描く側への想像力を持たせるのだと言う。



学習室で絵の具を保存する容器（豚の膀胱）を見せる
ベリンさん

そして、学習室では国立博物館群17館を網羅したパンフレットと、水色のトートバック、そしてお茶が用意されていた。余談になるが、このギャラリーだけでなく、ドイツでは行く先々でこうしたティータイムのおもてなしをうけた。本当にありがたかった。

さて、その水色のトートバックを見ると、「KINDER AKADEME」とプリントされている。さてこのキンダーアカデミーについてであるが、子ども達が国立博物館群の施設や資料を活用して専門的な体験教育を受けられるプログラム群だと言う。美術のみにとどまらず、民俗学や考古学、自然科学などさまざまな専門分野のコースがある。20名のスタッフのうち、10名が臨時に雇用された職員で、ほかにはベリンさんをはじめとした博物館群の教育普及スタッフが兼任している。1コースの定員は15名(分野によって多少異なる)で、11の専門コースがあり、ビルケルさんも美術史コースのスタッフである。

キンダーアカデミーの参加費は、1回90分が3~5回程度のコースで100ユーロとのこと。安くはないが、博物館の実物資料を特権的に使い、スタッフである専門研究者と密接に関わるこの博物館教育のシステムは、興味のある子どもにとって大変魅力的ではないだろうか。教育にかかる

コストに対するドイツの一般的な感覚はわからないが、かなり人気を得ているようすなので、相応な額と考える親が少なくないということだろう。

話を聴く中で、ベリンさんがこのキンダーアカデミーの発案者の1人であることがわかった。彼女によれば、キンダーアカデミーは、博物館の収蔵資料を子ども達のために活用したいという熱意によって実現したという。今回のドイツ訪問の中で、こうした個人の熱意が発端となり、大きな流れとなって定着している活動をいくつか目にした。アイデアを実現するバイタリティとそれをサポートする周りの理解が、新しい活動の原動力となることは、どの国でも同じなのだということ強く確信した。

(秋山幸也／相模原市立博物館)

⑤子ども博物館 MACHmit！（ベルリン）

MACHmit！Museum für kinder

訪問日時：2012年9月18日（火）10:00～13:30

対応者：Ms. Marie Lorbeer（館長）、Ms. Uta Rinklebe（教育普及担当）

概要

「ハンズオン＝直接触る」や「マインズオン＝五感をつかう」に重点を置く参加体験型の展示施設である。展覧会・アスレチック・工房（ワークショップ）を通じて、五感を活用し学ぶことで、小さい子供も無理なく理解でき楽しめる、また、大人になっても子供と一緒に来たいと思わせる、生涯楽しめる施設をめざしている。午前中は幼稚園や小学校関係（クラス単位、教師も参加）を、午後は家族連れ等をターゲットとしている（主に4歳～12歳）。子供関連施設の利用が多いのは、ドイツでは昼で終わる学校が多いことが関係している（全日制の小学校も近年増えてきている）。現に、ベルリン市内では、街中に何箇所も公園や託児所をみかけた。ドイツでは子供は3歳から託児所に通う権利があるとのことだった。緑も多く、子供をめぐる環境を羨ましく思った。



施設外観

運営について

設立は1992年。10年後に現在の場所に移転した（使用されなくなった教会を借地契約）。企画展を年に数回開催している他、常設として、アスレチックやワークショップ、喫茶コーナーが楽しめる。

年間の利用者数は約55,000人。運営にかかる経費は約45万ユーロであるが、ベルリン地区から7万ユーロの補助を得ているのと、年間の入館料収入が20万ユーロある。不足分は寄付やスポンサーを募ることによって補っているとのことだった。

従業員10人のうち、常勤フルタイムは1名のみで、他9人はフリーの職員である。開館日である火曜から日曜の間、部分的に短時間勤務する。職員によるワークショップは館内各所で随時行われている（有料）。

訪問時の展示

国連と連携して、子供の権利についての展示を行っていた。企画展は年に1～2回で、「紙」や

「夢を見る」、「記憶(思い出)」、「塩」など、様々なテーマに取り組んでいる。

今回の展覧会の主題は、①学校に行く権利、②子供の労働、③子供の男女平等、の3つだった。我々が訪問した時には、3~4才程度と思われる子供達が展示を見ていた。日本では小学校で憲法について学ぶが、幼稚園の頃から学ぶ機会があるだろうか、ドイツの子供達は果たしてその内容を理解しているだろうか。

館として何かメッセージはあるのか？という我々の質問に対しては、「そういうつもりはない。家に帰って、自分の権利について家族と話し合っ欲しい。強制はしない。考えるきっかけになって欲しい」という答えが返ってきた。

展示そのものは、はた織を体験させてネパールの子供達が強いられている労働の大変さを体験したり、館に遊びに来る子供のイラストなどを活用したパネルで権利について学ぶなど、いずれも動きのある工夫された展示であった。

会場内は元教会ということで、面積も充分なのだが、元々の建物の特性を生かし、アスレチックなどもあり、大人の我々が歩いても建築物や館の雰囲気を楽しめる工夫がされていた。太陽光を利用していることもさりげなく館内に掲示されていた。



来館者子供のイラストやテーブルセットを利用した館内
(左:展示、右:喫茶コーナー)



館内の電力に太陽光を利用

ドイツ派遣について

2週間という短くて長い派遣期間のなかで、ドイツでは見るもの聞くもの、全て初めての経験だった。私は実務で小中学生と触れ合う機会も多いので、子供向けに特化した博物館を見学したり、話を伺うことは大変勉強になった。そして、教育普及を担当される熱意とパワフルさには頭が下がる思いであった。女性が多いのにももちろん驚かされたが、家事や育児と両立しながら、それでも皆さんが輝く太陽の様な笑顔で毎日をパワフルにこなすのには我々派遣団全員が圧倒されたところである。女性としての働き方や教育機関を含めてのドイツの子供に対する考え方など、街中を歩くだけでもあちこちで垣間見られ、とても印象深かった。

特に MACHmit ! Museum für kinder の館長である Ms.Marie Lorbeer には、ホームステイもさせていただいた。電子レンジもテレビも無い静かな生活、自然のハーブを活用したシンプルで温かい料理に驚かされ、毎日家電やネオン広告などに囲まれる自分の生活が恥ずかしくも思えた。自分の実務にも、自分の生活にも生かして行こうと思えるすばらしいドイツ滞在と機会となった。

(鈴木里和／渋谷区立松濤美術館)

⑥ベルリンの壁記念センター

Gedenkstätte Berliner Mauer

訪問日時：2012年9月18日(火) 15:00～

ガイド：Dr. Sarah Bormhorst

概要

ベルリンの壁が存在したのは、1961年8月13日から1989年11月9日までのことである。この記念センターは、分断されたドイツの歴史的資料館として、またベルリンの壁とその犠牲者の追悼の為につくられた。野外展示も含めるとその範囲は1キロ以上に及ぶが、フィッシャー神父を中心とする活動が実り、ベルナウア通りが一番歴史的事件多かつたこともあり、現在の地に2000年に開館した。①「当時の犠牲者の写真を見るという情報」、②「犠牲者を弔う」、③「関連情報収集、整理、後世に伝える」、という3つのコンセプトを持つ。

ベルリンの壁については、犠牲者の数を含め不明な点が国内でも多かつたため、壁崩壊直後から記念館を作ろうという動きが国民の中にあり、研究プロジェクトが発足した。犠牲者の基準を決めて専門の職員がインタビュー等の調査を行い、アーカイブとして記録を残したり本を出版したりした。CDなどで一部分公開されているものもあるが(他館での公開を含む)、長期的な利用方法は決定していないとのことだった。



ベルリンの壁(右)と記念センター入口(上)

ガイドツアーとワークショップ

ガイドツアーは年間1,200回程度実施されている(予約制)。我々の訪問時も外国人観光客より多くの現地高校生がクラス単位で見学していた。1グループにつき、1名のガイドがついて、解説を行う。ガイドツアーを担当する職員は12人で、コンセプトを作らせること、研修で定期的に評価することによって、ガイドツアーの質の向上・維持につなげているとのことだった。

ワークショップについては次のように実施されている。①ガイドツアー後、壁の関係者(トンネルを作った人や反対運動を行っていた人)と対話をさせる、②写真セミナー、③ワークシートを見ながら展示会や施設を回る)の中で選択してもらい、資料は事前に送付する。質問についても事前

に用意してもらおう。どのワークショップについても、必ず終了後フィードバックを含めたディスカッションを行うとのことだった。

我々は野外展示を見学した。壁は意外に低いなと思わせる高さだったが、実は壁は数メートルを隔てた先にも並行してもう1枚あり、監視塔も残こされていて、見学者は隙間から覗くことにより、その絶望感にも似た距離を体感できる。「追悼記念の窓」と言われる壁で命を落とした人々を弔う展示もあり、礼拝堂では毎日その犠牲者の為の祈りが捧げられている。

運営その他について

入場は無料。運営は財団法人によって行われている。経費はドイツ連邦とベルリン州から半分ずつ補助を受けているとのことだった。職員は専任職員が27名ほど。他はフリーの職員である。

ベルリンの壁については、歴史的イベントであることもあり、我々の中でも大変興味深いものがあった。反戦へのメッセージはあるのか？歴史(記憶)には人としての主観が入りがちなので、あまりアテにならないこともあるのではないかとこの質問が相次いだ。これに対して、反戦へのメッセージについて意識はしているが、重要視はしていない。情報(主観を含めてか?)を伝えることによって、入館者が自分なりの意見を持って欲しいとのことだった。



歩道のプレートと
むき出しの鉄柱(壁の芯)

ドイツの首都ベルリンでは、チェックポイント・チャーリー、イーストサイドギャラリーなど多くの場所でベルリンの壁が見られる。お土産としてベルリンの壁を売っている所もある。

記念館にむけて、数キロを歩いた。この研修中同行して下さった方から聞いた壁があった当時の話を思い返しながら歩いた。永遠に続いていきそうな長い壁、むき出しになった鉄柱、犠牲者の名前などを彫った歩道のプレートなども多く見かけた。記念館に着いた時には、自分の国のことのように思えた。世界中の人に知って考えて欲しいと思えた。権利などの展示をしてもメッセージ性は持たないと彼らは言うが、美術館・博物館の存在意義について多くを考えさせられた。

(鈴木里和／渋谷区立松濤美術館)

⑦ドイツ連邦議会議事堂

Reichstag Berlin – Sitz des Deutschen Bundestages

訪問日時: 2012年9月19日(水) 午前

対応者: Dr. Roland Wirth



(左)議場堂上のドイツ国旗 (中)議事堂全景(右)「ドイツ国民のために」の標語

建物概要

ドイツ連邦議会議事堂はドイツの首都ベルリン・ミッテ区にある。パウル・ヴァロット(Paul Wallot)の設計により1884年から建設が始まり、1894年に完成した。当時、建物頂上の鉄とガラスのドームは最先端技術の粋といわれた。帝政ドイツ、ヴァイマル共和国を通じて下院の議事堂として機能したが、1933年に不審火によって炎上した。1945年のベルリン市街戦では、武装親衛隊の強力な抵抗拠点の一つとなっていたためソ連赤軍の主要な攻撃目標とされ徹底的に破壊された。議事堂内部には、当時のソ連兵が残した落書きが現在も保存されている。ドイツ東西分裂時は、西ドイツが首都を臨時的にボンに移したため、ドイツの歴史を問う内容の常設展示の会場として主に利用されていた。1999年に修復され、現在はドイツ連邦議会の議場が置かれている。

議事堂の前には広大な広場があり開放感がある。議事堂は一般に公開されていて、訪問当日も多くの観光客・見学者・修学旅行生でにぎわっていた。入場にはセキュリティーチェックも行われるが、警察官・警備員によるものものしい警備は少なく威圧感を感じなかった。



右:ドーム部

中:ドーム内部

左:レストラン看板

我々は、はじめに議事堂を見学し、その後、専門ガイドによるツアーに参加した。

見学ではまず議事堂最上階に上がった。ガラス張りのドームが最先端の素材で再建されており、内部にはサザエ堂状に螺旋する廊下が続き頂上まで行くことができる。頂上部からはベルリン市内が一望できる。屋上には美味しそうなレストランが併設されている。ドームから下を覗くと議員た

ちが座る議場の青い椅子が見える。ドーム見学後は、Dr. Roland Wirth によるガイドツアーに参加した。

議会議事堂の教育普及事業

Dr. Roland Wirth の説明によると、年間300万人の来場者があり、うち100万人がガイドツアーを利用する。議場側のスタッフは専任30名、フリー職員30名、学生アルバイト180名の体制で受け入れをしている。Dr. Roland Wirth 自身も歴史学者だがフリーの職員という立場である。参考までに記すと、2011年1月～12月の日本の国会議事堂参議院の見学者数は27万586人とのことだった。議場堂への入場、ガイドツアーへの参加はすべて無料。訪問日は議会開催日ではなく、会議室まで入り説明を受けたが、議会中でも休憩中なら会議室に入り説明を受けることができる。

公共の建物としての議事堂

Dr. Roland Wirth から次のような説明があった。1950年代から公共の建物の建築費の2%は芸術のために使わなくてはならないという法律があった。現在は廃されているが議事堂では適用された。フォスター、リヒター、ギュンター・ユッカーなど国際的なアーティストの作品が議事堂内に収蔵されており、作品・作家の一部は議事堂 HP で紹介されている(<http://www.bundestag.de/>)。



議事堂内外の作品

議事堂は1945年のベルリン市街戦では激戦地の一つで、6000名を越す戦死者がでた。戦闘終了後、占拠したソ連軍兵士により落書きがされたが、議事堂改修の際、この落書きは歴史的事実の一つとして保存された。



保存された壁と落書き

議事堂内には礼拝堂がある。キリスト教系政党が与党になるなど歴史的にもキリスト教の影響が強い。カトリックとプロテスタントの双方が1年おきに交代する。この礼拝堂は十字架と椅子は取

り外すことが可能で、世界のどの宗教にも対応することができるという説明があった。十字架はギンター・ユッカーの作品が使われている。

議事堂 1 階には、議事堂の 1/100 の樹脂製模型とベルリン市を俯瞰した都市模型などが設置されていた。視覚障害者への案内に利用され、触ることができる。触感はざらざらしている。



視覚障害者用の模型。
白髭の男性がガイドを
してくれたヴィールス
さん。

感想

年間 300 万人の入場者数には驚く。観光地の一つでもあり、セキュリティーチェックは厳重にされるが、不思議と威圧感はない。多くの外来者、場内各所に設置された芸術作品、議事堂も外光を取り入れて明るく「国民に開かれた議事堂」「民主主義の理念の追求」という印象を強く受ける。日本の参議院の平成23年の入場者数が27万人ということを考えれば、その試みは成功しているといえる。

Dr. Roland Wirth は、海外からの要人の案内も担当するとのこと。いかめしい感じでしたが、クイズの正解者にキャンディーをだすなどお茶目なところもある。

議事堂出入り口にはリヒターの大型作品が設置されている。黒・赤・黄色とドイツ国旗の色を意識させながらも、ドイツ国旗ではない、芸術としての独立した作品として設置されている。認識を「裏切る」ためのものであるという説明が印象に残った。



(左)議場傍聴席 (右)議事堂屋上で記念撮影

(倉成多郎／那覇市立壺屋焼物博物館)

⑧ケルン市博物館顧客サービスとラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館

Rautenstrauch-Joest-Museum

訪問日時：2012年9月20日(木) 10:00~12:00

対応者：Dr. Matthias Hamann (ケルン市博物館顧客サービスのディレクター)

Mr. Peter Mesenholler (ケルン市博物館顧客サービスの専任スタッフ)

Ms. Rita Boller (Museumsschool スタッフ)

1. ケルン市博物館顧客サービスについて

ケルン市内には25館ほどのミュージアムがある。そのうち9館が公立で美術史、文化史を扱っている。自然史系博物館はない。ケルン市博物館顧客サービスは、これらの博物館の教育普及活動を担当している。この組織は、博物館に限らずケルン市内の施設におけるコミュニケーション、PR活動を業務としている。ドイツ全体で6,000館ほどの博物館があるといわれているが、こういった組織はどこにでもあるわけではなく、ケルン特有のものである。

組織の専任スタッフは24名、ほかにフリーランスのスタッフが120名いる。フリースタッフには、大学生(20%)のほか芸術家などがある。スタッフに対しては常に研修を行うなどして質の向上を図っている。スタッフそれぞれにプログラムのコンセプトの作成とその実施をさせ、それをチェックしながらサービスの質の確保を図っている。

活動の内容は、ガイドツアー、メディア、ワークショップである。ワークショップは音楽も含み様々なものがある。中には東洋系のものもあり、組み紐のプログラムなどもある。年間7,700プログラムを実施、そのうち800プログラムが無料で、他は有料である。参加者は135,000人(来館者は年間約100万人)。市内の9館の公立館には1人ずつの担当者がいる。学校のクラスの来訪が多い(18才まで無料)。まずそのターゲットを念頭においてテーマを考え、他のフリースタッフなどとともにプログラムの内容を詰めるという。

このような組織の長所としては、高い質のプログラムが保たれることである。1つの新しいプログラムを考案→試行→実施→フィードバックというスタイルで効率的に行うことができ、効果も上がっている。費用の多くは利用料金収入でまかなっているが、外部からの助成ももらっている。短所としては、博物館の内部事情や議論が分からず、館の方針や考えが明瞭に把握できないことが時々あるとのことだった。

エデュケーターは、1980年代には極めて低い位置づけにあり、その事務所も地下室だったが、最近では、キュレーターとほぼ同じレベルになってきた。プログラム内容が充実し、運営する機関・組織としての評価も良くなってきている。行政や政治家からも認められるようになり、収入・待遇も上がっている。博物館建物を建設する時もエデュケーターの意見が取り入れられるようになってきた。

学校側からの評価としては、学力や知識の向上だけでなく視野が広がったと言われているとのことだった。テーマごとの世界の文化を知ることによって自分たちの文化を知ることになる。博物館としての評価については、量的指標にはプログラム数や利用者数の増加、質的指標には教育の専門家会議への招待、印刷物への論文依頼、賞の授与などがあって、外部からの客観的評価が上がっているという。たえず、フィードバック活動をおこない、何が良かったか悪かったかの分析を行い改善に努めている。長期的な学習者行動評価は特に行っていない。

博物館にはメッセージがあり、顧客には多様な希望や要望がある。その調整の必要性を感じていると聞いた。プログラムに参加したい人々は増えている。その中でニューメディアを活用して意見を言う人も多い。最近では、そのような人々の声を認め反映させていこうとしている。

同館ではまた、市民が参加する形態として、学校の生徒がキュレーターとなって展覧会を企画実施するというプログラム(ジュニアミュージアム)を行っている。このプログラムは館内に専用の部屋が設けられており、そこで活動している。最近では世界の子どもたちの生活を紹介するものなど3つの展覧会を行った。同種のプログラムは、ベルリンなど他の町でも行われているようである。

2. Museumsschool(博物館学校)について。

Museumsschool(博物館学校)は、25年前にケルン市ではじまった1つの形態で、教師が現職のまま博物館へ派遣され、そこで教育普及活動を行うものである。教師の数は当初は2名であったが現在は8名で、1週間で計24時間博物館に派遣され勤務する。例えば月、金は学校へ行き、火、水、木は博物館で勤務するというような形である。本務校は小学校、中学校、高校であり、専門は美術、歴史など多分野にわたる。半年研修を行いその後博物館へ派遣されることになる。期限はあるがそのまま継続していることが多い。

業務としてはケルン市博物館顧客サービスの専任スタッフ(24名)やフリーランススタッフとともに教師の観点から利用者にかかわり、より充実したプログラムとなるよう努力している。

また、一般教員向けの研修も行っている。研修の内容は新しい美術館の紹介、企画展の紹介などである。エドゥケーターでなく教師だけでプログラムを実施する場合も時々あるため、その時のガイドツアーやファシリテートの方法などの研修を行っている。研修の際、教育プログラムに対しての要望やその後の学習者への影響を尋ねることもある。それらを参考にしつつ、協力を得て次のプログラムを作成いくこともある。

ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館では、来館する教員は子どもたちの安全管理が主で、教育指導はエドゥケーターに任せるのが一般的であると聞いた。学校はカリキュラムに基づいて来館し、館はそれぞれの状況に応じてプログラムを実施していく。事前学習をおこなって来館するケースや、事後学習をおこなうケース、特に何もしないケースなど、学校の取り組み方は様々である。

3. ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館について



外観



展示室(住まい)



展示室ツアー用リュック

ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館は文化人類学と民族学を扱う博物館で、1901年に創立された。現在の建物は2010年11月にオープンしたものである。年間で38万人ほどの入館者がある。世界を地域別に分けるのではなく、例えば「住み方のスタイル」といったテーマを設けて世界の民族に関する展示空間を作っている。3,800㎡の空間に2,500点を展示している。所蔵するコレクションは約65,000点あり、第1次大戦終了時までには収集したものが多し。教育普及のためのフリー職員が16名おり、民族や宗教などそれぞれの専門分野をもっている。ガイドツアーは少なくとも1時間半をかけておこなうという。

展示室にはそれぞれのコンセプトがしっかり示されている。最新のメディアをつかった展示はわかりやすく魅力的であった。世界中の若者の雑誌が展示してあるコーナーがあった。それらから世界の若者の興味関心を探り展示に活かすという手法には興味深いものがあった。ワークシートやプログラム集については、希望者は購入することができる。学校は無料で使うことができる。

ガイドツアーに参加しない来館者が自分たちで展示を観覧するためのキット(リュック)が何種類も用意してあった。希望に応じて貸し出しをしている。また、学校からの来館がある時、一般客との混乱を避けるため、開館前に普及プログラムを行うこともあるとのことだった。

(可児光生／美濃加茂市民ミュージアム)

⑨シュニユットゲン美術館(ケルン)

Museum Schnütgen, Köln

訪問日時: 2012年9月20日(木) 14:00~15:30

対応者: ケルン市顧客サービス部門長 Matthias Haman 氏

1. 概要

シュニユットゲン美術館は中世美術、特に教会芸術を中心とした美術館で、ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館(以下、ヨースト博物館)と同じ建物内にある。19世紀に教会勢力が衰退する中、牧師の Schnütgen 氏が各地の教会から収集した資料がコレクションの中心を成している。元は別の所にあったが、聖セシリア教会のある現在地に移転された。この教会は元々病院付属の修道院で、第二次世界大戦後に博物館として転用されることになったという。

2. 運営組織

シュニユットゲン美術館はヨースト博物館と相互協力関係にあつて、来館受付やワークショップルームを共用しているほか、ヨースト博物館の展示室で美術館のコレクションを展示することもある。両館の運営はケルン市博物館顧客サービス部門が担当しており、広報や運営の点で共通する部分は多い。ただし、職員はそれぞれ別で、シュニユットゲン美術館にはエドゥケーター3人とガイドツアーを担当するフリーの職員 10~15 人が勤めている。

ヨースト博物館との相違点としては、次の2つが挙げられる。1つはコレクションで、シュニユットゲン美術館は、8~17世紀の教会美術作品を中心としており、絵画以外の収蔵資料に関してはほとんどを展示している。よく知られているコレクションとして石彫のレリーフおよび法衣がある。

2つめは展示コンセプトや手法である。教会離れが進む中で、生活の中でのつながりを模索することをコンセプトとしている。世界の習俗をテーマ別に見せるヨースト博物館に対し、中世芸術をニュートラルに見せるスタンスである。

3. 館内の概要

ケルンはキリスト教世界の重要な都市でもあったので、コレクションの中には高い水準の宗教美術品が含まれている。敷地内にはハーブを育てたり、イベント会場ともなる中庭がある。隣接する聖セシリア教会は、戦災を免れた13世紀ロマネスク形式の教会で、現在は、木彫を中心に他所の教会から収集された資料も含めて、本来あるべき場所に近い配置で展示している。



聖セシリアのレリーフ(12世紀)

4. 子ども向けプログラムとコレクション

シュニットゲン美術館では、子どもが好みそうな展示作品ごとに、プログラムが用意されている。なお、所蔵資料のうち、法服と絵画以外はほとんど展示しているようで、ほぼ常設展を利用したプログラムになる。学校団体の受入は年に150クラス程度で、クリスマス前は特に多いという。なお、ワークショップおよびガイドツアーの参加には予約が必要とのことであった。



(1) 聖ゲオルク像

東洋では吉祥文とされている竜だが、西洋におけるドラゴンは悪と捉えられている。聖ゲオルクは町から美女を連れ去るドラゴンを剣でもって退治し、町を解放した騎士である。この騎士にちなんで、中世の剣を作るワークショップを開催したり、パペットツアーを行ったりしている。ツアーでは、博物館入り口でパペットを登場させ「友達探し」をしながらこのゲオルク像にたどり着き、作品について話した後、ワークブックに取組むこともできる。(ワークブックについては後述)



(2) 「暗い」中世イメージの払拭

人々の表情がよく見える様に、聖書の「イエスとアポストロ」の彫刻を露出展示している。イエスが死者を生還させたことに驚く、面々のユーモラスな表情に聖書中の登場人物をより身近に感じてもらい、「暗い」中世イメージを払拭するのが狙い。



この作品についてとくにプログラムの設定はないようだったが、見せ方でイメージを変えるという発想は、資料を展示する上で有用だと感じた。

(3) 15世紀のステンドグラス

クリスマス前には「天使のパレード」というプログラムを行う。展示室内で天使を探し、天使や悪魔が描かれた2枚のステンドグラスにたどり着く。その作品を鑑賞した後、ワークショップルームに移動して天使をつくるというものである。

5. 工房(ワークショップルーム)

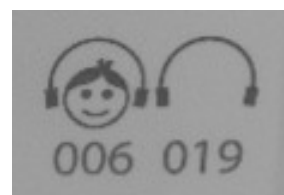
ヨースト博物館と共用の施設である。美大生が展示品からインスピレーションを得て制作した中世風衣装もあり、子どもは仮装できる。



6. 子供向け音声ガイド

子ども向けの音声ガイドは、子どもの関心が高そうなもののみ用意されている。オーディオガイド

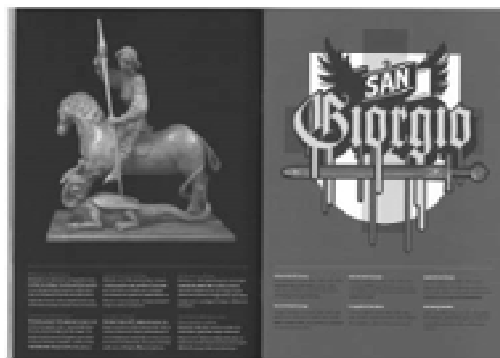
を貸し出しており、子ども向けの解説があるところには、資料キャプションに子どものマークがある。通常の解説内容を子ども用に構成しなおし、男の子と女の子が学芸員と会話する物語調になっている。試聴してみたところ、効果音を多用し、抑揚をつけた話し方で物語が展開されていた。ドイツ語のため、内容までは理解できなかったが、楽しそうな雰囲気は感じ取れた。



子供向け音声ガイドのマーク(左)

7. ワークブック

美術館の展示作品に関するワークブックを売店で販売している。展示室のキャプションはドイツ語表記のみ、オーディオガイドはドイツ語と英語だったが、ワークブックにはドイツ語、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、トルコ語の6カ国語を併記している。移民の多さを反映してのことだが、作品ごとに言語の異なる説明ブロックが6つ並んでいる様子は、日本にしか住んだことのない筆者にとって新鮮だった。また、説明のみならず、作品ごとの扉ページにもドイツ語以外の言語を採用しており、(例: 聖ゲオルク像の扉はイタリア語のもの)各言語を平等に扱おうとする姿勢が垣間見られた。



聖ゲオルクの章の扉ページ
(タイトルはイタリア語)

ワークブックで取上げているのは美術館の展示作品だが、館内はもちろん家ででの復習にも使えるようになっている。その趣向も、作品の背景にあるストーリーを漫画化してみる、作品から発想するものをアルファベット順に書き出してみる、詩を書いてみるなど、様々である。



扉ページ下部。左上から、ドイツ語、英語、スペイン語、フランス語、イタリア語、トルコ語。

ワークブックの制作には学校も関わっており、実際に子どもたちが描いた作品が数多く掲載されていた。美術館のワークブックの制作に学校現場も参画できている、あるいは学校の協力を得られている背景には、ミュージアムシューレのように、継続的に学校と博物館を連携させるシステムの存在が大きいのではないかと思った。

8. その他

ワークショップとは別に、他のドイツの博物館同様、この美術館でも聖ゲオルク像を用いた子どもの誕生日会プランを用意している。「変わったところで誕生日会をしたい」という親子にニーズがあるらしく、近年、子どもには騒ぐ権利があるという考えが定着してきていることとも関連しているようだ。

(西田亜未／たばこと塩の博物館)

⑩ベンラート宮殿公園(デュッセルドルフ)

Schloss Benrath, Düsseldorf

訪問日時: 2012年9月21日(金) 午前

対応者: Ms. Margitta Dobrileit

1. 主の不在に耐えた離宮

ベンラート城はプファルツ選帝侯カール・テオドールによって1770年に建立された夏宮である。建築家、ニコラス・デ・ピカージュが設計した本館は淡いピンク色の壁面の優雅なたたずまいで、内部の装飾はロココ調から新古典主義への移行期らしく両者が折衷した建築として知られている。60ヘクタールに及ぶ広大な庭園はライン川へ連なり、18世紀のこの地に君臨した選帝侯の威光をうかがうことができる。



宮殿の前でドーブリライツさんから説明を受ける

私たち派遣団は、この博物館の教育普及担当であるマギタ・ドーブリライツさんの案内で開館前の宮殿内に入った。まず驚いたのは、この離宮の主であるカール・テオドール選帝侯が滞在したのが、建立されてから15年後にたったの4時間だけだったとの説明である。後のエリザベートですら、落成の記念式典が行われた時の4日間だけだったという。

いつ主が滞在中でもいまいまいと離宮としての維持管理が万全に行われていたはずであり、そのコストに対する主夫妻の滞在時間はあまりにもアンバランスである。使用人のモチベーションをどのように保っていたのか、それとも主不在の気楽さを満喫していたのか、余計なことが気にならずに仕方がなかった。

2. バロックから新古典主義へ

宮殿の脇に、歴史資料館として公開されている建物がある。ここには城の全貌を概観できる縮小模型やその歴史を学ぶための展示室があり、子どものためのガイドやワークショップもここを中心に実施されている。中には当時の貴族の衣装のレプリカがあって、実際に着用できる。それを着て、宮廷生活への想像力を高めてもらうのが狙いであろう。他の美術館や博物館でもいくつか同様のプログラムについて紹介された。異なる時代や文化に対して参加者が能動的に関わることのできる方法として有効であるようだ。

宮殿に移動し、内部の数ある部屋をドーブリライツさんに導かれて1つずつ入っていくが、途中から強い既視感を覚える。それもそのはずで、宮殿は正しく対称を保って作られていて、片翼が選帝侯のため、もう片翼が後のための建物なのである。ちなみにそれぞれの寝室からダイレクトに

下りることのできる庭園もまたそれぞれ専用の庭園であり、外部から遮断されている。客として夫婦が招待されれば、やはり夫婦がそれぞれ両翼の客間に分かれてもてなされるということだろう。

サロンとして使われることが想定された部屋は、バロック様式後期に特徴的なロココ調の見事な装飾が施されていた。室内に庭を持ち込むという考え方に基づいて、窓越しの風景も装飾の一部となるよう効果的に窓の配置がなされている。ローマ神話をモチーフにした壁画や装飾が随所に散りばめられ、ディテールをよく見れば狩猟の神ディアーナや曙の女神アウロラなどのレリーフを難なく見つけることができる。

一方、客間の一部には典型的な新古典主義の様式が見られた。過剰な装飾への反動としてシンプルさが求められていたとはいえ、主の格の違いを客に思い知らず演出なのではないかと勘ぐりたくなるような質素さだった。

ところで、両翼に分かれた選帝侯と後のプライベートルームであるが、後の浴室には選帝侯の部屋からつながった秘密の通路があると言う。選帝侯夫妻は、血筋を守るために当時の貴族の間では普通に行われていた、いとこ同士の結婚であり、不仲であったとされる。しかし、そもそも同時に滞在したことが無いという事実はこの通路も本来の役割を果たすことは無かったということである。設計者もさぞかし残念に思っているにちがいない。

3. 自給用の畑も再現

広い庭園はヨーロッパ造園術博物館として2002年に再整備され、2004年から財団が管理する博物館としてスタートした。中でも自給用の畑だった一角はその耕作のようすを再現するため、17世紀から18世紀の作物を栽培するよう心がけているという。庭園の景観もその時代に近づける努力がなされているようだ。ドーブリライツさんによれば、今後は子ども達に対して中世の作物や食べ物の解説も行っていくとのことであった。



庭園の一部を歩いて見学する

フラワーガーデンではコスモスやダリア、アゲラタムなどが咲き乱れていたが、それほど念入りな手入れがなされているようすはなかった。これはドイツのほかの公園などにも言えるが、園芸目的で栽培している植物でも、きちんと刈り込んだり形を整えたりはしないようである。この庭園は19世紀に入ってイギリス庭園の様式に造り替えられたということであるので、余計にそう感じられたのかもしれない。

宮殿のほうは時折、結婚式会場として貸し出しているという。ドイツでは、博物館として現地保存されたこのような建物を結婚式やパーティー会場として貸すことは珍しくないようである。日本でも近年、結婚式や披露宴がより小規模になって、個性が強まる傾向にあり、こうした博物館利用が広まる土壤もできつつあると感じられた。

(秋山幸也／相模原市立博物館)

⑪ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館(デュッセルドルフ)

Kunstsammlung Nordrhein-Westfalen, Dusseldorf

訪問日時: 2012年9月21日(金) 14:30~16:00(K20)、16:30~18:00(K21)

対応者: Mr. Peter Schuller (教育部キュレーター)、Georg Frangerberg (AKKIスタッフ)

1. 概要

日本人の駐在員も多く住む、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都デュッセルドルフには、「K20」と「K21」の2つの展示館からなる、州立近現代美術館がある。「K」はコレクション(Kunstsammlung)の意味なので、さしずめ「20世紀館」、「21世紀館」という呼称であろう。現在、この2館は時代区分にこだわることなく展示を行っており、訪問時には、K20で現代美術アーティストの個展が、K21ではクレーの企画展準備が行われていた。2つの館は街の北と



K20エントランス

南に離れているが、メルセデス・ベンツ社が提供するマイクロバスで移動することができる。私たちはこの2館を、教育部キュレーターであるペーター・シュラー氏の案内で見学した。

2. K20のギャラリー内にあるワークショップルーム「ラボ」



K20常設展示室。カンディンスキーの大作

州立近現代美術館の教育活動のキーワードは、「参加と能動」である。たとえば地元の小学校と連携して、8-9歳の児童が、クレー展の開会式スピーチやガイドツアーを行う。また、青少年がヨゼフ・ボイス展で雑誌を作りそれを配布したり、大人向けに「ケンカデュエット」(漫才のようにコンビが掛け合いで作品紹介する)が行われたりもする。

教育部門のスタッフは、職員5名のほか、ボランティア1名、インターン数名、フリーランス

約30名からなる。1961年に開館したK20のゆったりとした空間には、初代館長の精力的な収集活動によって獲得された、クレーやカンディンスキー、ロスコやベーコン、ボイスなどのコレクションが並んでいる。コレクションの秀逸さやスタッフ数のゆとりからは、州立美術館として比較的予算に恵まれている様子が見受けられる。

K20のギャラリーの一角に、「ラボ」と名付けられたワークショップルームがある。来館者がいつでも気軽に立ち寄れる場所である。我々が訪れた時には、作家 Thomas Saraceno のインスタレーション作品に参加するためのコーナーとなっており、私たちは、厚紙で多面体を作って吊らすという20分程度の工作を楽しんだ。



ラボで工作にトライ

展示室の並びのただなかに、多少にぎやかになるラボを配置して、騒音などのクレームは無いのかとシューラー氏に質問したら、「ない。子どもにも博物館を楽しむ権利がある」との返事。通訳のパチケさんが、ドイツでは法律で、「子どもにはうるさくする権利がある」と保障されていると補足説明してくれ、我々はみな驚いた。

3. K21のスタジオと、デュッセルドルフ市の文化教育政策「文化リユック」

K20から車で 10 分程度の場所に位置するK21は、州議事堂だった威風堂々たる建物を改修したものである。中庭だったところにはガラスの天井がかけられ、口の字型の回廊に沿って並ぶ広めの展示室で、ボルタンスキーやパイク、カバコフなどの大型インスタレーションを見ることができ、4 階までの吹き抜けの大空間は、公的なセレモニーやパーティーに活用され、英国のエリザベス女王も来館されたとのこと。古い入れ物に新しいアートを並べて政治家が活用するという場に、日本には無いものを感じた。

観覧後、併設された「スタジオ」に通された。州の助成により設けられたこのスタジオには、撮影機材やコンピュータが備え付けられている。スタジオでシューラー氏から、デュッセルドルフ市の政策「文化リユック」についても聞くことができた。文化リユックとは、5 年前から市が掲げている文化教育政策で、子どもたち全員を、小学生の間に「オペラに1回、美術館に1回、ダンスに1回、劇場に1回」招くことで、一生背負えるリユックのような文化的体験を与える、という考えに基づく。現在はこの政策のもと、文化助成が行われている。



K21スタジオ。左シューラー氏、右フランケンベルグ氏。

4. 子どもの芸術活動を支援するNPO「AKKI」

スタジオではまた、デュッセルドルフ市で子どもの芸術活動を支援する非営利団体「AKKI」のスタッフである、ゲオルグ・フランケンベルグ氏を紹介された。

AKKIは、25年前から市と契約して活動を行っており、2004年からは拠点となる建物の提供も市から受けている。その運営方針は、①子どもが自ら学ぶ、②毎日の生活の中の文化に注目する、③子どもと文化を結びつける、ということにある。たとえば、夏休みの3週間の「街づくりワークショップ」では、市内にある芝生の広場に、子どもたちが街を作る。270人の子どもが話し合いながら、家や銀行、映画館や市場を建てて運営する。市長選挙も行われるので、本物のデュッセルドルフ市長が「子ども市長」を表敬訪問することもある。スタッフは、8人の職員と150人～200人のフリーランス（アーティスト、ミュージシャン、演劇人、大工、テレコム職員など多岐にわたる）からなる。財政的には、市が半分を負う。残りの半分は、スポンサー、ワークショップ参加費、展覧会入場料、展覧会の貸出料（巡回収入）、他市からのプロジェクト費などで賄う。K20がAKKIにプロジェクト依頼をしたこともあるという。

このようにして、NPOが文化施設と市民の間に入り、子どもとアートをつなぐために多様な活動を提供する形は新鮮であった。

（一條彰子／東京国立近代美術館）

⑫子ども博物館 Mondo Mio ! (ドルトムント)

Mondo Mio! Kindermuseum, Dortmund

訪問日時: 2012年9月22日(土) 10:30~12:00

対応者: Ms. Elisabeth Limmer (館長)

概要

ヴェストファーレンパークという巨大な公園の中にある博物館である。EXPO2000のイベントを契機に開館した。まだ歴史は浅いが、「この世界には全ての人が生活できる資源があるのに、それでは物足りない人が一部にいるために足りない」というガンディの思想に影響を受けた施設であるとのこと。現在はユネスコの認定を受けている。

開館は11時で、ターゲットとしているのは、ベルリンの子ども博物館 MACHmit!と同じく、午前中はグループで来る幼稚園児や小学生、午後や週末は家族連れである。展示方法も体験型展示だが、「MACHmit!」よりこちらの方が、対象年齢が低いという印象を持った。

他にも「MACHmit!」と違う点としては、中近東を始めとする他の国々の子供達の生活がどういふものであるか、皆世界の子供であるという考え方をゲームやワークショップを通じて、継続的に子供達に教育していこうという点である。ドイツは都市にもよるが人口の約50%が移民であり、それと同時に所得や学歴の格差などが生まれ、社会問題となっている。この博物館の設立の背景にはそのような事情もあるものと推測できる。

運営

ドルトムント子ども博物館の運営は社団法人(非営利)によるもので、ドルトムント市の援助が大きい。

職員は館長、教育普及(1名)、インターンシップ(2名)と、事務員(1週間20時間労働)やボランティアなどから成る。展示のコンセプトは館長と教育普及で考えるとのことだった。

ドイツで大変驚いたのは、教育に携わる者(教師等)は必ず美術館か博物館などの文化施設での1年間のインターンシップが義務化されていることである。お互いの職を理解し合うことが、学校と文化施設の連携の第一歩につながる。日本でも見習うべきだと思う。



エリザベス館長と通訳のハイケさん

訪問時の展示

色使いも明るく工夫された体験型の展示で、キャプションは小さい子どもでもわかりやすいよう簡素化されている。「色々な国を旅行しましょう！」という内容で、入館時にパスポートを作り、東南アジアで使われている車を体験したりすることができる。



水に見立てた砂を運ぶ展示



水をくみ上げるために掛かる費用を示した展示

ドイツらしいなと感じたのは、砂の入った袋を水に見立てて、バケツで運ばせる展示や、ドルトムント市内のポンプ会社からの協力を得て、手動のポンプを紹介し、水のくみ上げを理解させるなど、エネルギーの大切さを考えさせる展示であった。水や電気などの資源がいかに大切なものであるかが、楽しみながら一目でわかり、自分の日常生活においても水や資源の大切さを小さな頃から学ぶことができるのだろう。資源が限られているのは日本も同じである。考えさせる展示や視点が新鮮であった。

(鈴木里和／渋谷区立松濤美術館)

⑬鉄と鋼の博物館(ハッティンゲン)

LWL-Industriemuseum Henrichshütte, Hattingen

訪問日時: 2012年9月22日(土)

対応者: Ms. Anja Hoffmann, Ms. Birgit Diermann

1. 博物館の歴史

鉄と鋼の博物館は、ヴェストファリア地方の産業博物館連合(LWL-Industriemuseum)に所属する8施設の1つである。1854年に精錬工場としてHENRICH社が建造し、1987年まで工場として稼働していた。1990年に博物館連合に入り、2000年博物館として活動を始めた。



2. 館の目的

地域の鉱山と鉄鋼の長い歴史・思いを守ることを目的としている。子供に伝えたいことは、身の回りにある、鉄へのきづきで、どういう風に鉄が作られているかを知ってもらい、またどうして鉄が必要かを知ってもらいたいとのことだった。

3. 展示と補助・コミュニケーションツール

展示では、1987年まで使われていた溶鉱炉などをそのまま使用している。屋外展示が主で、機械は動かない。1987年当時のままの展示物については、HENRICH社に勤めていた人が、毎年メンテナンスに来る。展示解説は、赤、緑、黄色のパネルがあり、赤はこの博物館の歴史、緑はこの地域の植物や環境の変化を説明している。



写真1. ねずみの道のパネル

黄色は子供向けで、これを辿る見学ルートは、通称「ねずみの道」と言われている。ねずみの道には、パネルに必ず黄色い円形のマークがあり、なおかつ青色のねずみキャラクターが登場し、子供に語りかける(写真1)。最初にこのパネルとマークのことを子どもたちに教

えると、その後はすぐに、自らこうした黄色のパネルを見つけるようになる。

ねずみをキャラクターにした理由は、昔工場にはねずみがいたことと、何処にでも行ける動物だからで、同館のエデュケーターの発案であるという。子供向けの展示は、写真、音声、イラストなどを利用している。

子供向けでは、ほかにも、キーワードが書かれた用紙が配られ、要所のパネル内にあるキーワードをチェックし、ある場所では入力すると、金庫が開きある言葉が得られる。それを受付で伝え、ピンバッジがもらえるというプログラムがある。なおこのキーワードは、定常的なもので変えない。この点については、たとえ同じでも子どもたちは何回でもやるし、他にも触ったり、動かしたりするものがあるため、その点はそれほど重要ではないとディアマン氏はいう。

屋内の一部には子供向けの室内展示場があり、触ったり、動かしたり、音を聞いたり、できるものがあつた(写真2)。該当の展示物には、一見してそれとわかるマーク(手、耳、目)をつけている。大きな音が出るものもあるが、うるさすぎて、子ども自身で止めるそう



写真2. 屋内の子供向け展示

また、最近できたという、作業を体験できる公園を見学した(写真3)。溶鉱炉の各過程を疑似体験できるものである。砂を鉄に見たて、鉱山の運び出し、運搬、流れ出る鉄の作業、冷却作業を行うことができる。



写真3. 作業を疑似体験できる屋外のスペース

ディアマン氏によると、一部の作業は、子供1人で行うには難しいものもあり(写真3)、同僚から指摘をされもしたが、担当者としては、1人ではできない仕事だということを知ってもらいたかった
ので、このままにした。

また、子どもたちには当時の労働条件についても話す(写真右:労働条件について解説している場所)。重労働で、大変な仕事であったこと、仕事から帰っても寝るだけであったことを、テキストで説明したり、簡素な家具を置いて子どもがイメージしやすいようにしていた。



なお、この鉱山の閉鎖に対しては、職を失うということで、多くの反対があった。しかしストライキなどをして、お金が一部支払われた。子供には、こうしたことも話し、「行動をすれば、効果がある」ということも伝えている。

見学したドイツの産業博物館を見る限り、当時の現状をそのまま保管している。錆びが進んでいたり、危険箇所がむき出しになっていたりし、日本の感覚で見ると来館者への安全対策として不安な点がある。が、それらがかもし出す雰囲気は歴史の重みを感じさせられた。

(藤井麻希/トヨタ博物館)

⑭ペーパーミル産業博物館(ベルギッシュグラッドバッハ)

LVR-Industriemuseum Papiermühle Alte Dombach, Bergisch Gladbach

訪問日時: 2012年9月23日(日)

対 応 者: Ms. Beatrix Commandeur(教育普及担当)

1. 館概要

①歴史

1620年にこの地域で小規模な紙をつくる小屋が建てられ、徐々に拡大していったが、1910年頃には、水車がとりはずされ、製紙場ではなく、職員のアパートになっていた。1984年にラインラント地方の産業博物館連合(LVR-Industriemuseum)の所有となり、1999年に博物館となった。



②館の目的

この地域の産業の紹介、紙の作られ方や、昔の生活を知ってもらうことを目的としている。また、近年増加している紙の消費についても、知ってもらうことが大切と考えているとのことだった。



③展示と補助ツール

個人で見学するときには、オーディオガイド(英語、オランダ語)がある。現在、スクリーンを見て理解できる手話のガイド装置を準備中とのこと。館内はエレベーターがついており、車椅子の利用も可能である。

まず展示場にはいると、20年間のドイツの紙消費量を示した、赤い線グラフが壁一面にある(写真1)。教育普及担当のコマンダー氏は、まずここで、「今日使った紙はどのようなものがありましたか?」と質問するそうだ。その後、展示を見てもらい、自身の回りにある、多くの紙の存在に気づいてもらう。



写真1. 紙の消費を表すグラフ



写真2. 身の回りの紙と割合



写真3. 紙すき体験

また、体験場では、紙すきの体験もできる(写真3)。これは、子供たち一人ひとりが体験できるもので、予約は必要ない。コマンダー氏によると、子どもにとって博物館というと静かにしなくてはいけないというイメージがあるが、この体験コーナーは、敢えて展示場の真ん中につくり、子供たちに博物館の可能性を与えているとのことである。

他にも、紙製作のためテスト用に作られた小さい機械を、スタッフが動かすのを見ながら、紙がどのように作られるかを知ることができるものがあった(写真4)。この機械は、製紙工場で働いていた人によって、操作とメンテナンスが行われている。



写真4. 機械での紙の作成実演



写真5. 水車を使った実演



写真6. 便器に座るとビデオが再生

3. 教育普及活動

教育普及担当者(エデュケーター)はコマンダー氏1人である。来館者は、幼稚園児と小学生が多く、ガイドツアーで回るケースがほとんどである。なおこの博物館では、年間で400~500クラスを受け入れている。

その他の活動としては、コンサートやお祭り、子供のためのお誕生日会を実施している。我々が訪れた日もコンサートが行われていた。地元の音楽学校の生徒(年齢は様々)による、古い楽器を使ったものであった。

こうしたコンサートは、まだ始めてまもない活動で、会場の展示予定がない時にのみ行うとのこと。会場の使用料については、たとえば今回の場合は、会場借用者が来場者1人あたり2.5ユーロを博物館に支払う。この日は、最後に主催者から寄付のお願いがあり、会場の出口で子どもが籠をもち、寄付金を集めていた。



写真7. コンサートが開かれた古い建物



写真8. ポスター



写真9. 機械のすぐ前での演奏会

またこの日は別の会場で、ドイツで活動をする折り紙の団体(主として高齢者)による折り紙のワークショップも開かれていた。各テーブルに指導者がおり、参加者の希望を聞きながら、緩やかに進めていた。

参加者は家族連れが多かった。参加した人に聞くと、館から案内が届き、このワークショップを知ったとのこと。この家族の場合、母親が折り紙に興味をもっており、参加者との交流を求め、ケルンから家族4人(夫婦と小学校の子ども男女)で参加していた。

2時間半のワークショップは、子どもからお年寄りまで、折り紙を通して人々が交流を図る場のようにも感じた。派手な演出や大掛かりな設備はないが、参加者が紙の1つの楽しみ方である折り紙を、ゆったりと、心ゆくまで楽しめるものであった。

その他、誕生日会については、40 ユーロで、ガイドツアーを受け、会場を使用することができる。「うるさいと文句いったりする人はいないのか」の問いに、コマンダー氏は「文句を言われこともあるが、仕方がない。うちは美術館ではない」と答えた。ドイツ訪問で様々な美術館や博物館に行ったが、館側が「こどもが博物館で楽しむ権利」を強く保護しようとする姿勢はどの博物館でも変わらないと感じた。



写真10. 折り紙ワークショップの様子

(藤井麻希／トヨタ博物館)

⑮ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik, Bonn Deutschland, Bonn

訪問日時: 2012年9月24日(月) 11:45~13:15

対応者: Ms. Alma Hanning (フリーランスエデュケーター、歴史学者)

Ms. Helena von Wersebe、Ms. Dorothee Dennert、Dr. Simone Mergen

同館では1945年以降の社会、政治に関する歴史を中心に展示している。オリジナル映像や最新のメディアを駆使した展示手法が特徴である。展示物とともに建築、空間の構成、風景も大事にされている。

展示室に入ると、約4メートルの黒いキューブの展示スペースが最初に現れる。そこでは1933年からのユダヤ人の歴史が紹介してある。ユダヤ教会の破壊、強制収容所など衝撃的で残酷な写真の展示がキューブの内外にある。歴史的事実を直接正面から見てほしいという博物館の意図であった。ただし外に展示してある画像は大人の目線の高さにあわせてあり、子どもに対しては保護者が判断して必要性を感じれば子どもを抱き上げるなどして見せるという配慮が施してあった。

館内は10年ごとの時代区分が設定され、それぞれにテーマ、メッセージが明確に示してある。

1940年代はドイツ分断と反乱の歴史である。戦車の実物の展示はインパクトがあった。展示には3つのパターンがあって、①実物とキャプションだけ、②これに壁面の大パネルを追加したもの、③さらに詳細パネルも追加したもの、と形を変えて整理して伝える工夫があった。パネルの文字の大きさも大中小とあり、大中には英語も併記してある。パネルは単なる解説ではなく、問いかけの文章が基本となっており、できる限り観覧者の解釈に委ねている。子どものためのオーディオガイドやノート(ワークシート)も設置してある。

1950年代で特徴的なのは東西に分かれたそれぞれの文化の紹介である。映画、文学、玩具などがわかりやすく展示してあった。1960年代はベルリンの壁がメイン。実物展示とともに有名無名人々の当時の証言が聞くことができる。ベルリンの壁記念センターで集められているアーカイブ



高い位置の展示



展示室

としての生の声が活用されている。

3階は 1970 年代以降の歴史である。3階に上がるとそれまでの展示空間(2階)が俯瞰できる。あらためてその全貌を見、展示内容を振り返って、自分の中で再構築することができる。



展示室(原油価格)



展示室(EU・現在)

3階では科学技術の発展の紹介とともに、まさに現代社会が抱える問題—たとえば移民、労働問題、経済危機などがテーマとして取り上げられている。EU(欧州連盟)の一員として、困難な世界的課題を博物館としても直視していこうという強い意思が窺えた。

(可児光生／美濃加茂市民ミュージアム)

⑩ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟

landes verband museums padagogik nordrhein-westfalen e.V.

訪問日時： 2012年9月24日(月) 9:15～11:15

場 所：ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)

1. ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟について

ボン歴史博物館で標記団体の会合に参加する機会を得た。この会合はノルトライン・ヴェストファーレン州にある博物館、美術館に勤務する教育関係者が集まって、年に2回開催しているものである。今回のテーマは、「自分で発見するための案内」で、博物館にある資料をどのようなツール(オーディオガイドやリュックなど)を用いて示すか、博物館における学習について考えるというものであった。

なお、ドイツ連邦全体に関しては、ドイツ連邦博物館教育連盟(BVMP)が組織されており、ノルトライン・ヴェストファーレン州博物館教育連盟からは毎年、複数の理事が選出されているとのことだった。複数選出の理由について質問してみたところ、同州は人口も多く、多様な博物館・美術館があるからだ、との説明があった。今回の会合についても、あくまで連邦の中の一つの州の会合であるにもかかわらず、ゲストスピーカーをオランダから招聘し、167名という大勢の参加者があり(派遣団のメンバーも参加者として名簿に掲載していただいた)、活気のある雰囲気の中で開催された。



会場内風景



参加者で賑わうロビー

前日までに見学したラインラント地方の博物館—ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館やノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館、産業博物館といった施設で会った教育普及担当者とも、この会合で再会することができ、教育普及担当者間の横のつながりの強さを感じた。ロビーは、情報交換の場として活用されており、各館の教育プログラムやキットを紹介するブースが設けられて

いた。我々が見学したのは開式の挨拶と2つの報告だけだったが、配布されたプログラムを見ると、9時から17時まで終日にわたって報告が組まれていた。



ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館のキット

2. 報告「オランダにおける General Learning Outcomes の試験的实施について」の内容

この会合で見学したもののうち、オランダ・アムステルダムにて博物館教育の学校を主宰している Ruben Sumit 氏の報告について、簡単に紹介しておく。以下はハンドアウトおよびパワーポイントの要約と、筆者による補足である。

(報告の概要)

イギリスでは、来館者の反応を探る上で適切に開発された GLO (General Learning Outcomes) を指標として利用している。GLO は博物館教育について分析したり、個人や社会に与える影響に関する議論を容易にする手法とされている。

今回、イギリスの専門家による調査と研究をふまえて、オランダで試験的な実践を行うにいたった。リサーチの目的は「どの程度まで GLO の枠組み、手段方法論がオランダに受け入れられるか」である。この試験的取組みについて、10-12歳の小学生と個人利用の大人という2グループで調査してみたいと考えていたところ、6つの博物館や文化遺産の研究所がこのプロジェクトに参画を表明し、実際には各館それぞれ30人の就学児と30人の大人が参加した。(なお、実験手法についてハンドアウトには説明がなかった。パワーポイントから推察すると、来館者に、博物館で気づいたことを絵で紙に書いてもらい、解説してもらい、さらにその解説を GLO の要素の中に振り分けていくものと思われる。)

来館者の感想はそれぞれ GLO の要素に関連付けられた。参加した167人の児童の結果は、enjoyment と inspiration and creativity が51%と著しく多かった。大半の児童が、補助的な活動の多い特別プログラム(遊びの要素が強いということだろうか?)に参加していることを考慮すると、この結果は当然であろう。knowledge and understanding が19%、attitudes and values は21%でこれらの数値は大人よりも低かった。skills は8%、behaviour and progression については1%で、ほとんど言及されなかったといえる。

総括として、オランダの現場に GLO が転用できるかという試みについて、言葉の上ではオランダへの転用は成功したといえる。来館者が館で得た感想すなわち「思いつき」とも表現できるものは、適切に GLO の枠組みに適合した。来館者の感想には、容易に仕分けできるものもあれば、

GLO に当てはめるための再考を必要とするものもあったが、最終的にはすべて GLO の論理の中に位置づけられた。

一方で、GLO の観点だけに来館者の反応の属性を求めると、それ以外の博物館での多様な経験について見落としかねない。これら来館者の反応について共通理解をもつことが、博物館の社会的経済的意義を示す必要が生じた際に、非常に有益になるものといえよう。

(GLO に関する補足)

主題である GLO についての説明があまりなかったので、参考資料は次のウェブサイトにてご覧いただきたい。URL: <http://www.inspiringlearningforall.gov.uk/toolstemplates/tutorials/test.html>
GLO の「General」は「一般的」という意味で、従来の教育で設定されがちな特定の目標とは対照的なものである。GLO とは、learning を計測するのではなく、来館者が博物館で「学んだ」と言っていることについて、直接的あるいは関連のある情報を集める手法と思われる。

GLO による分析は、来館者の感想を大きく5つの要素に仕分けするというもので(この仕分けの基準については説明がなかったのだが) knowledge and understanding、skills、 attitudes and values、 enjoyment、 inspiration and creativity、 action、 behaviour and progression の5つに帰属させることができるという。

なお、この発表では、GLO の効用にあわせて Learning という語の解釈にも言及があった。

発表者によると、「learning」について専門家の間では大きな見解の相違があり、研究では、「learning」にかわって「visitor's experience」という表現が使われているという。(なお、イギリスでは、より偏りのない表現として「visitor's outcomes」が使われているとのことだった。)

この learning という語の解釈について、難解で概念的な説明が続く中で、「言い得て妙」というべき表現が提示されたので紹介しておく。education と learning の対比から来館者の意見として紹介されたのが「education が誰かが私に対して行うことであるのに対し、learning は自分自身が行うことである」とのこと。非常に端的な表現だと感心した。

(西田亜未／たばこと塩の博物館)

⑰ リンドラー野外博物館

LVR-Freilichtmuseum Lindlar

訪問日時：2012年9月25日(火) 午前

対応者：Ms. Hilde Ullrich

1. 郊外の野外博物館

ドイツ派遣のプログラム最終日になって、ほぼ初めて傘をさす程度の雨模様の朝となった。

ゾーリンゲンからアウトバーンと一般道を車で1時間ほど走り、たどり着いた博物館は郊外の緑に囲まれた野外博物館だった。着いた頃には傘をさそうかどうか迷う程度の小降りになっていたので、ヒツジなどの放牧地が広がる博物館敷地内は雨に濡れた緑が鮮やかで、とても美しく感じられた。



広々とした放牧地が広がる野外博物館の敷地

この野外博物館は19世紀の農村の文化や食生活をテーマとして1998年に開館した。目的は大きく二つある。一つは、昔の人の生活を残し、伝えること。もう一つは、自然との関わりについて、体験の中で自然をどのように生活に取り入れ、保護していくかを考えることである。

ガイドを務めて下さったヒルデ・ウルリッチさんによると、近代まで農地として農薬も使われていたこの地を、19世紀の状態に戻すのは大変だったそうである。その100年以上に及ぶ年月の中で野生動物も減少したが、野外博物館として整備を進める中で徐々に回復しつつあるとのこと。そうした「自然の回復」をととても重視している様子が、ウルリッチさんのお話の端々に感じられた。

2. 鍛冶屋をまるごと移築

まず案内された建物は、見るからに古めかしい鍛冶屋だった。農具や蹄鉄などを作っていた鍛冶屋で、現在建っている場所から6kmほど離れた場所にあった。廃屋同然に放置されているのを学芸員が発見し、移築したそうである。ちなみに、部材にまで解体せず、建物をいくつかに分けて運んだ点をウルリッチさんは強調されていた。現在、展示施設としてだけでなく鍛冶屋として実際に稼働しており、博物館内で使用する釘など簡単な鉄製品ならここで作っているそうである。

鍛冶屋は当時、村で使われるあらゆる道具類の生産に関わる場であり、鍛冶屋から金敷を打つ音が聞こえているということは、その村に活気があることの証だったという。その意味でも、この

鍛冶屋は野外博物館にとって象徴的な施設であり、実際に稼働しているということが重要なのだろう。

3. 体験型プログラムを体験

この博物館の視察には、とても楽しい「体験学習プログラム」が用意されていた。それは、栽培されているハーブを収穫し、博物館で生産されているパンや野菜を使って料理をし、食べるというものである。

まず、多種のハーブが植えられた螺旋状の花壇で、ウルリッチさんが手際よくハーブを摘む。ミント、レピスチウム、ニラ、セージ、ヨモギ、メリッサ、マジョーラム、ジャコウソウ、ローズマリーと、多様な香りが積み重なり、収穫用のバスケットを中心として次第に豊穡な香りが広がる。

次に、室内へ移動してメンバーがそれぞれ数名ずつ、リンゴとジャガイモの皮をむく、ハーブを刻むなどの係に分かれて作業に入った。メニューはポテトのパンケーキ、リンゴのコンフォート、それにハーブティーである。

千切り状に細かくスライスされたポテトをたっぷりのバターで焼き上げると、香ばしく濃厚な香りが部屋に充満した。

ウルリッチさんのてきぱきとした指示に従って作業を進めること約40分、素材を存分に生かした料理がテーブルに並んだ。ポテトのパンケーキは、使ったバターの量のわりにあっさりとした味わいで驚いた。付け合わせのリンゴのコンフォートや、ハーブとチーズ、サワークリームを和えたソースと抜群の相性だった。

お腹がいっぱいになるまで食べて、さて片付けを、と思ったところで移動のタイムリミットになった。しっかり後片付けまでしてプログラムを全うしようと思っていたのだが、申し訳ない気持ちを残して野外博物館を出た。



ハーブの花壇



ハーブを摘むウルリッチさん



調理をする派遣団メンバー

当日は、小学校高学年と思われるグループや幼稚園児が訪れていて、それぞれ野外活動や調理などを行っていた。2泊3日の宿泊プログラムが一般的とのことで、日本で言う林間学校のようなものかもしれない。同館のキャパシティはどう見ても数十名といったところである。「野外体験」だけでなく、昔の村の暮らしを生態学的な背景を交えて学習するとなると、そのくらいの人数が限界であろう。

日本に置き換えてみると、中山間地がその自然や地域コミュニティを生かした学習施設を運営していくためのヒントが、この野外博物館にはいくつもあった。生物多様性に配慮した環境保全をつきつめていけば、それは人間社会的における地域の多様性の維持に直結する。「村おこし」がイベント依存で均質化してしまう現状に対して、こうした学習施設の充実への方向転換は、活路を見いだす重要な足がかりになるのかもしれないと感じた。

(秋山幸也／相模原市立博物館)

⑱ゾーリングゲン産業博物館

LVR-Industriemuseum Gesenkschmiede Hendrichs, Solingen

訪問日時: 2012年9月25日(火) 午後

対応者: Ms. Nicole-Maria Scheda(教育普及担当)

1. 館概要

1886年にHendrichs兄弟により、ゾーリングゲンに‘The Hendrichs Drop Forge’が設立された。燃料のために必要な材木が多くとれる森林に囲まれ、Wupper川の流は動力として使えたため、この地で産業が栄えたという。しかし、1986年には工場が閉鎖され、1999年に博物館としてオープンした。今や刃物で世界に名の知れた、このゾーリングゲンの地域産業の歴史と、ハサミを通したものづくりを紹介している。ラインラント地方産業博物館連合(LVR-Industriemuseum)に所属する6施設のうちの1つである。

館内は、25年前まで使われていたという工場を、その当時の状態のまま、手をあまり加えることなく、展示場になっている。そのため、機械のみならず、残された鋳型や製品をそこかしこに見ることができる。



2. 展示と補助・コミュニケーションツール

展示を理解する手段として、パネル、音声ガイド、ガイドツアー、機械の実演、ワークブック(子ども向け)、ワークシート、触れる展示物がある。

我々はガイドツアーに参加したが、ゾーリングゲンで産業が発達してきた理由、歴史、ハサミがどのような工程で作られるのか、などを知ることができた。こうしたガイドツアーは事前予約が必要で、有料とのこと(料金は1団体につき40ユーロ)。ガイドツアーの実施者は約8人おり、1回実施ごとに対価として37ユーロを受け取る仕組みになっている。

パネルでは、写真が2種使われており、白黒写真は100年前のこの工場の様子、カラー写真は現在の(他の)工場の様子で、両者を比較することができる。

音声ガイドは3種ある。大人用と子ども用と、ドイツ語が不慣れな人のために簡単なドイツ語を

使用したものである。また、古い機械が実際に動く姿を見ることができた。こうした機械を扱うことができる人は4人おり、交代で実演をしているとのことだった。



写真1. 館内風景



写真2. ハサミの工程の
実物展示



写真3. 色分けされた
音声ガイド表示



写真4. 機械実演

3. 教育普及

教育普及担当者(エデュケーター)はニコル・シェーダ氏1人だけで、その下に2人のハーフタイムの職員がいる。シェーダ氏自身もハーフタイム職員とのことだった。

展示場には、子ども向けに、触って理解できる展示物が設置されている。ワゴンに載せられた木製の道具(写真5)では、切断や鍛造など、実際には触ることのできない機械の役割について、安全に学ぶことができるようになっていた。また簡易な型押し機(写真6)があり、粘土を使い、ハ



写真5. 滑車がついた
子供向けワゴン

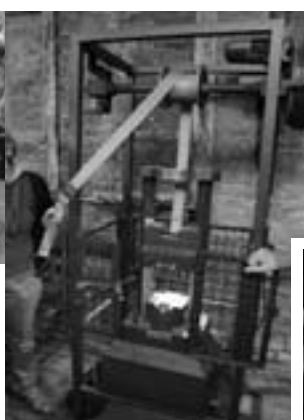


写真6. 簡易の型押し機の機械



写真7. ワークブック

サミのプレス体験することができる。その他、作業台もあって、子供達が型をとったハサミを研磨することも可能である。学校団体向けのプログラム内容は、以下①と②を組み合わせたものである。

- ① 会社の紹介したあと、A.労働条件か、B.ハサミの作り方について話す(45 分間)。どちらかにするかは、受入チームで検討をする。
- ② 自分の手ではさみを作る(30 分間)。

学校の先生との事前打合せについては、先生によって異なり、する場合としない場合がある。同館ではこの他に、コンサートなどのイベントやパーティの受け入れも行っている。

4. 問題点と課題

教育普及担当のニコル・シェーダ氏によると、こうした産業博物館が抱える問題としては、機械を動かすことができる人が少なくなっていることだという。

さらなる課題として、機械を動かす人は、機械を扱うことはできる。が、それだけでなく、機械を通して、地域の産業や歴史など、大きな視点で来館者に話すことができるようにすること、を挙げた。この点については、筆者自身にも同様の問題意識がある。ドイツの産業系博物館を回り、共通して感じたことは、それぞれの展示物を通して、その対象となるもの、それに加え、地域、産業、人々の暮らしの歴史をしっかりと伝えようとしていることである。

(藤井麻希／トヨタ博物館)

付 録

平成24年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する企画公募要領

1. 事業名 平成24年度「青少年国際交流推進事業」

2. 事業の趣旨

国内外の青少年指導者及び次代を担う青年リーダー、高校生の海外派遣・日本招へいを行い、内外の青少年の現状や問題点等についての意見交換や、青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流事業を実施する。

3. 委託事業の実施

下記「4. 委託事業の内容」(4)の相手国側実施団体と連絡・調整し、青少年国際交流推進事業を実施する。

(1) 派遣

日本国内において、相手国に派遣する人員の募集・選考を行い、日本団の派遣を行う。

(2) 受入

相手国からの派遣団の受入れ、下記「4. 委託事業の内容」の趣旨・テーマ等に沿った適切なプログラムを作成し、実施する。

4. 委託事業の内容

委託事業名：日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業

(1) テーマ

「博物館における青少年教育」

(2) 派遣者募集対象

上記テーマに関係する青少年指導者

(3) ドイツ国側実施団体

連邦青少年文化教育連合会

(4) 実施期間及び人数

派遣 15日間（発着日含む）

7名

受入 15日間（発着日含む）

7名

※実施時期については、いずれも平成24年9月～11月頃を想定

(5) その他

①派遣事業においては、参加者事前研修を実施すること。

②日本国内で発生する経費について計上することとし、ドイツ国内で発生する滞在費は計上しないこと。

例えば、派遣事業における経費は、ドイツに到着するまで及び日本国に到着してからの滞在費、並びに自国訪問団にかかる保険料等を計上すること。また、受入事業における経費は、相手国訪問団が日本国に到着後から出発するまでに発生する通訳に要する経費、交通費、宿泊費、食費、研修経費等を計上すること。

③受入事業においては、2都市（大都市・地方都市）を訪問すること。また、ホームステイの実施に努めること。

④事業実施に当たっては、スポーツ・青少年局青少年課及び参事官（青少年健全育成担当）委託事業事務処理要領、青少年国際交流推進事業委託要項及び青少年国際交流推進事業委託要領の定めに従って適切に処理すること。また、相手国実施団体と緊密な連絡体制を構築すること。

5. 企画公募に参加する者に必要な資格に関する事項

- (1) 予算決算及び会計令第70条の規定に該当しない者であること。なお、未成年者、被保佐人又は被補助人であって、契約の締結のために必要な同意を得ている者は、同条中、特別の理由がある場合に該当する。
- (2) 予算決算及び会計令第71条の規定に該当しない者であること。
- (3) 文部科学省から取引停止の措置を受けている期間中の者でないこと。
- (4) 委託要項（別添）に掲げる委託先の要件を満たす者であること。

6. 企画提案書の提出方法等

(1) 企画提案書の提出方法

- ① 用紙サイズをA4縦判、横書きとする。
- ② 提出方法は、E-mail、郵送、又は持参とする。

○E-mail

- ・提案1事業につき送信1回で下記(3)のアドレス宛に送信する。
- ・送信メールの題名は、「青少年国際交流推進事業応募」とすること。
- ・添付ファイル名は提案事業名と提案者名とすること。
- ・提案書類は下記③で示すファイル形式で提出すること。

○郵送

- ・簡易書留、宅配便等で送付すること。
- ・封筒に「青少年国際交流推進事業企画提案書在中」と朱書きのこと。
- ・提案書類は紙媒体で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。

○持参

- ・受付時間は平日9時30分～17時（12時～13時を除く）とする。
- ・提案書類は紙媒体で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。

③ その他

- ・企画提案書を提出する際には、組織の代表者名（又はその代理者名）で提出すること。
- ・企画提案書に関する事務連絡先（照会先）を明記すること。
- ・企画提案書は、日本語及び日本国通貨で記入すること。
- ・ファイルの形式は、一太郎、マイクロソフトワード、マイクロソフトエクセル、マイクロソフトパワーポイント、PDF及びテキスト形式とする。
- ・郵送（又は持参）による電子データは、FD、CD、又はMOにて提出すること。

(2) 提出書類

- ① 企画提案書（別紙 申請様式）
- ② その他必要と思われる資料

(3) 企画提案書の提出場所及び問い合わせ先

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
文部科学省スポーツ・青少年局参事官（青少年健全育成担当）付国際交流係
TEL 03-5253-4111（代）（内線3487）
FAX 03-6734-3795
E-mail sposeisy@mext.go.jp

(4) 企画提案書の提出期限等

提出期限：平成24年6月8日（金曜日）17時必着
提出先：上記(3)に示す場所。

(5) その他

企画提案書等の作成費用については、選定結果に拘わらず企画提案者の負担とする。
また、提出された企画提案書等については返却しない。

7. 事業規模（予算）及び採択数

事業規模：総額49,870千円程度を予定。

採 択 数：6件を採択予定。

（本件は上記のうち1件に相当する。他5件については既に公募済。）

8. 選定方法等

(1) 選定方法

事業企画評価委員会において、提出された提案書類にて書類選考を実施する。

(2) 審査要領

別途定めた審査要領（別添）のとおり。

(3) 選定結果の通知

選定終了後、速やかにすべての提案者に選定結果を通知する。

9. 契約締結

選定の結果、契約予定者と企画提案書を基に契約条件を調整するものとする。なお、契約金額については事業計画書の内容を勘案して決定するものとするので、企画提案者の提示する金額と必ずしも一致するものではない。また、契約条件等が合致しない場合には契約締結を行わない場合がある。

10. スケジュール

(1) 公募締切：平成24年6月8日（金曜日）17時

(2) 書類審査：平成24年6月中旬

(3) 採択及び事業計画書の提出：平成24年6月中旬から平成24年7月頃

(4) 契約締結：平成24年7月以降

(5) 契約期間：契約締結日から平成25年3月10日まで

11. 誓約書の提出等

(1) 本企画競争に参加を希望する者は、企画提案書の提出時に、支出負担行為担当官が別に指定する暴力団等に該当しない旨の誓約書を提出しなければならない。

(2) 前項の誓約書を提出せず、又は虚偽の誓約をし、若しくは誓約書に反することとなったときは、当該者の企画提案書を無効とするものとする。

(3) 前2項は、支出負担行為担当官が誓約書の提出を要しないと認める場合は適用しない。

「博物館における青少年教育」に係るドイツ派遣事業参加者 募 集 要 項

財団法人日本博物館協会
(文部科学省スポーツ・青少年局委託事業)

1. 趣旨

博物館の青少年指導者の相互交流や研究協議、意見交換等を通じて、青少年指導者の資質の向上と青少年育成の発展を図るとともに、両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築します。あわせて、共同体験を伴う異文化交流や意見交換等を通じて、広い視野とともに、異文化に対する理解や国際性を養います。

2. 派遣事業実施概要

- (1) 研修テーマ ドイツの博物館における青少年教育
- (2) 内 容 ベルリン及びラインラント地方（ケルン、デュッセルドルフ、ドルトムント、ボン）の博物館等を見学し、教育担当者との交流や意見交換を行います。
- (3) 日 程
 - 事前研修会 平成24年8月23日（木） 東京（霞が関周辺）にて1日間
 - 派遣期間 平成24年9月13日（木）～9月27日（木） 15日間
 - （予定）9/13 成田発、ベルリン着
 - 9/13～9/19 ベルリン滞在
 - 9/20～9/26 ラインラント地方
ケルン、デュッセルドルフ、ドルトムント、
ボンを歴訪
 - 9/26 フランクフルト発
 - 9/27 成田着プログラムの詳細についてはドイツ博物館教育者協会(BVMP)にて調整中。
- (4) 募集人数 6名
- (5) そ の 他 派遣期間終了後、研修レポートを提出していただきます。

3. 応募資格

- (1) 博物館に勤務し、青少年教育に携わる方
- (2) 派遣事業（事前研修会を含む）に全期間参加できる方
- (3) 心身の健康状態が良好で協調性に富み、研修計画に従って規律ある団体行動ができる方（宿泊先では相部屋となる可能性もあります。また、行程に1泊程度のホームステイが含まれる予定です。）

4. 諸経費（参加者の自己負担をお願いするもの）

- 参加金 約15万円（ドイツへの渡航費の半額相当分を予定）
- パスポート取得経費（有効なパスポートをお持ちでない方のみ）
- 事前研修会出席に係る交通費等
- 成田空港までの往復交通費、ドイツの機関・団体等への資料・お土産代、ドイツ国内でのプログラム中に提供される食事以外の飲食費、自主研修における交通費・見学費等は、別途自己負担となります。

※ドイツ国内でのプログラムにおける交通費、宿泊費、食費（飲み物を除く）、見学費等はドイツ連邦政府が負担します。

5. 応募方法

平成24年7月27日（金）までに、館長による推薦書（様式は別紙の通り）を財団法人日本博物館協会にご提出ください。

6. 参加決定について

提出された書類を基に選考を行います。結果については平成24年8月3日（金）までに本人に連絡いたします。

7. その他

・ 派遣者について

日独青少年指導者セミナーは文部科学省スポーツ・青少年局が財団法人日本博物館協会に委託して行う国の事業です。派遣への参加が決まった方には、財団法人日本博物館協会より文書にて依頼をさせていただきますが、国からの派遣依頼と同等の扱いになります。

・ 参加金のお支払いについて

ドイツへの渡航費が決定した段階で、参加者にご連絡いたしますので、平成24年8月31日（金）までに、財団法人日本博物館協会が指定する銀行口座にお振り込みいただきます。

・ 参加決定後の取り消しについて

本人の都合により事業への参加を取り消す場合には、辞退理由書を提出いただくとともに、所定の取消料をお支払いいただきます。また、ドイツ研修の途中で帰国する必要が生じた場合は、自費にて帰国していただきます。なお、参加金は返金いたしません。

問い合わせ先・推薦書提出先

財団法人日本博物館協会 日独青少年指導者セミナー担当

〒100-8925 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館

電話 03-3591-7190 / FAX 03-3591-7170

Eメール webmaster@j-muse.or.jp

協力機関・団体等

事業実施に当たり、当協会会員をはじめとする以下の関係諸機関・団体等の方々に多大なるご協力を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

巖島神社
大原美術館
紙の博物館
川越市立博物館
全国美術館会議教育普及研究部会
国立科学博物館
国立西洋美術館
産業技術記念館
損保ジャパン東郷青児美術館
東京国立近代美術館
東京国立博物館
東京都江戸東京博物館
東京都美術館
徳川美術館
広島県立歴史博物館
広島市こども文化科学館
広島平和記念資料館
目黒区美術館

(五十音順)

平成24年度 文部科学省スポーツ・青少年局委託事業
日独青少年指導者セミナー（芸術分野）
博物館における青少年教育に関する日独交流事業報告書

発行 平成25年3月10日
編集 財団法人 日本博物館協会
〒100-8925
東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館
TEL 03-3591-7190
印刷 タナカ印刷株式会社